新富町文化財調査報告書 第2集

鐙(あぶみ)遺跡

藤掛(ふじがかり)遺跡

1983.3

宮崎県新富町教育委員会

新富町文化財調査報告書 第２集

鐙（あぶみ）遺跡

藤掛（ふじがかり）遺跡

1983．3

宮崎県新富町教育委員会

序

新富町では、昭和56年遺跡分布調査により、遺跡の分布状況を確認し、報告書を発刊しましたが、今回は、「新富町の埋蔵文化財第２集」として、鐙・藤掛両遺跡の報告書を刊行することになりました。

発掘調査に際しては、宮崎県文化課、各関係機関をはじめ調査指導の先生方、調査担当の先生方のご尽力を、そして多くの作業員の協力をいただき、調査に多大の成果をあげることができました。ここに関係者各位に心からお礼申し上げます。

また、本報告書が社会教育・学校教育ならびに文化財保護等広く活用いただけることを期待いたします。

新富町教育委員会

教育長　高　松　昌　波

鐙　遺　跡

例　　言

1．本報告は、新富町三納代における造成工事に伴い、新富町教育委員会が実施した鐙遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は、昭和55年３月23日から３月27日及び昭和56年２月13日から同年３月27日までの２回にわたって実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査主体　新富教育委員会

教育長		高　松　昌　波
社会教育課長		新　名　正　坦
〃　課長補佐		山　本　繁　幸
〃　文化財担当		松　原　富美彦
〃　〃		富　田　次　男
調査員	１次	面高哲郎（宮崎県総合博物館、現文化課主任主事）
	２次	石川恒太郎（宮崎県文化財保護審議委員）
		日高正晴（　同　上　）
		面高哲郎
		北郷泰道（県文化課主事）
		有田辰美

4．地質関係の調査を宮崎大学教授遠藤尚氏、Ｖ字溝のプラントオパール分折を宮崎大学助教授藤原宏志氏に依頼した。

5．本報告の方位は磁北である。

6．本報告に使用した図面の作図、製図は、遺構については調査員で行い、遺物については津隈久美子、増田滋子、酒井晴子、高橋加奈子諸氏の協力を得た。

7．出土遺物は、新富町教育委員会で保管している。

8．執筆は、Ｉ－２の調査に至る経過を松原富美彦が、他は面高が行った。

9．本報告の編集は、面高が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに……1
1．遺跡の所在地……1
2．調査に至る経過……2
Ⅱ　調査の記録……3
1．調査の概要……〃
2．弥生時代……5
(1)Ⅴ字溝……〃
遺　構……〃
遺　物……6
(2)1号住居跡……9
遺　構……〃
遺　物……10
(3)2号住居跡……11
遺　構……〃
遺　物……〃
(4)その他……13
遺　物……〃
3．古墳時代……16
古　墳……〃
遺　物……19
Ⅲ　結　語……20

挿　図　目　次

第1図　遺跡の所在地……1
第2図　遺構分布図……4
第3図　Ⅴ字溝土層図……5
第4図　Ⅴ字溝実測図……〃
第5図　Ⅴ字溝出土遺物(1)……7

第６図　Ｖ字溝出土遺物(2)…… 8
第７図　１号住居跡実測図…… 9
第８図　１号住居跡出土遺物……10
第９図　２号住居跡実測図……11
第10図　２号住居跡出土遺物……12
第11図　竪穴状遺構出土遺物……14
第12図　出土遺物（石器）……15
第13図　北東部の葺石平面図……16
第14図　古墳実測図……17・18
第15図　古墳出土遺物……19

図　版　目　次

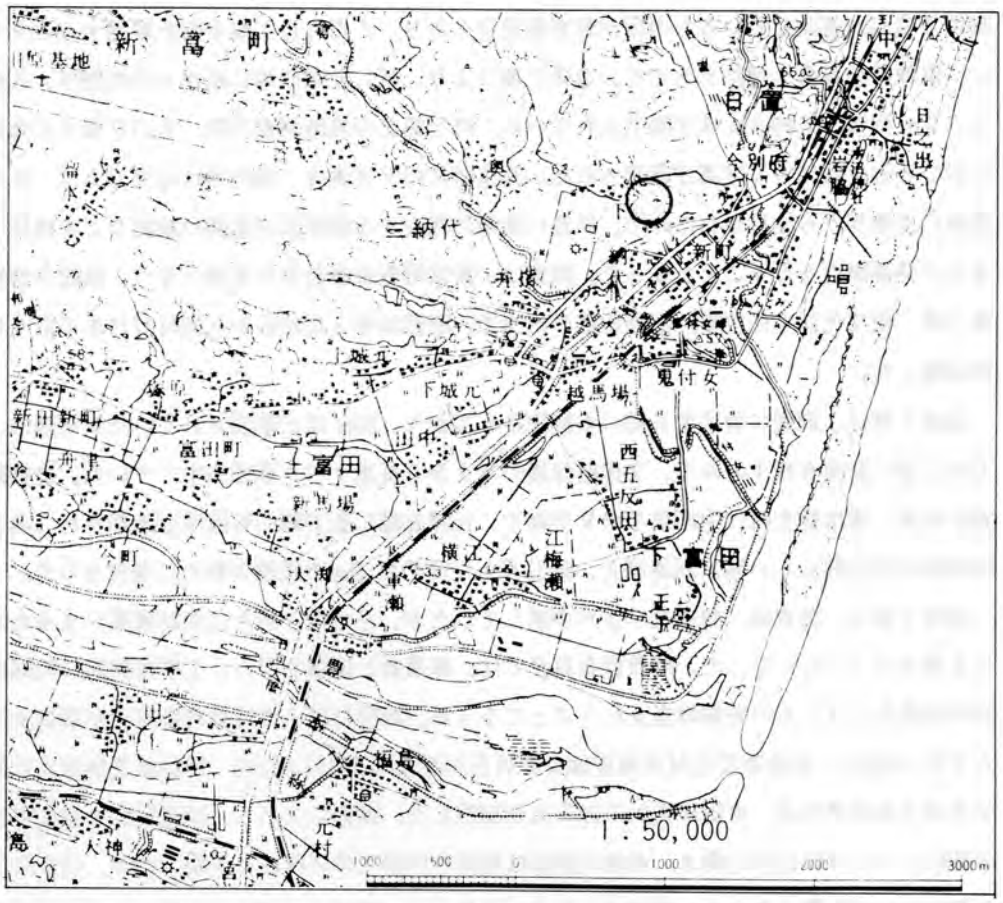
図版１　(1)遺跡の近景……23
　　(2)発見当時のＶ字溝……〃
図版２　(1)Ｖ字溝……24
　　(2)Ｖ字溝・遺物出土状況……〃
図版３　(1)１号住居跡……25
　　(2)２号住居跡……〃
図版４　(1)古墳（伐採後）……26
　　(2)古墳（表土を剝いだ後）……〃
図版５　(1)古墳北東部の葺石……27
　　(2)遺物出土状況……〃
図版６　Ｖ字溝出土遺物……28
図版７　Ｖ字溝、１号住居跡出土遺物……29
図版８　２号住居跡　竪穴状遺構出土遺物……30
図版９　出土遺物……31
図版10　古墳時代遺物……32

Ⅰ　はじめに

1．遺跡の所在地（第１図）

新富町は、宮崎県のほぼ中央部を東流する一ッ瀬川の河口右岸に展開する町で、地勢は、沖積地、洪積世台地等から成り、洪積世台地は町域の３分の２を占める。台地は、河川により開折され、また、日向灘に面する東縁は急崖となっている。

日向新富駅北西 500m には、鬼付女川と日置川間を南東へ延びる洪積世台地があり、鐙遺跡はその南端に立地する。遺跡の立地する地区は、侵蝕によって分断され、東西に延びる丘陵性地形となっている。その頂部には小面積ながら２ケ所の平坦面があり、最大面積を有する中央平坦面は、ミニゴルフ場となっている。今回調査したのは西平坦面である。遺跡の立地する丘陵性台地は標高約58m で沖積面との比高差は、約50m である。



第１図　遺跡の所在地（○印）

町内の大半を占める洪積世台地上では、ナイフ形石器や原形細石核等を出土する旧石器時代の遺跡や縄文時代早期の集石遺構を伴う遺跡が近年多く発見されており、また、昭和56年から昭和58年にかけて３回にわたり弥生中期末～後期初頭の新田原遺跡が発掘調査されている。新田原遺跡では、内への突出部をもつ花弁状竪穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡は、戦前発掘調査された新田原古墳群が著名で、また、鐙遺跡の立地する丘陵性台地は、富田古墳群の一画にはいる。

なお、弥生前期の板付Ⅱ式の壺を出土した今別府遺跡は、正確な所在地は不明であるが、鐙遺跡下の砂丘上と推定されている。

２．調査に至る経過

昭和55年２月、新富町ゴルフバッテングセンターのある丘陵西端で行われていた造成工事現場で集石が露出しているとの報が教育委員会へあり、ただちに工事中断を要請するとともに、県教育委員会へ連絡をとった。造成工事により、既に丘陵西端に拡がる平坦面は、北縁３～５ｍ程残して約３ｍほど削平されていた。町と県との現地調査の際、北のり面から弧状にのびる弥生時代のＶ字溝が確認された。弥生時代のＶ字溝は、県内では初見であり、また、遺跡の立地等から注目されたので、早急に遺構の残存する範囲及び遺跡の範囲などを確認するため発掘調査を行うこととなった。調査は、新富町教育委員会が主体となり、県総合博物館主事（現文化課主任主事）面高哲郎の担当で、昭和55年３月23日から同月27日まで計５日間実施した。

造成工事は、調査に着手する前にも継続されており、20ｍほど確認されていたＶ字溝は、北のり面に断面を残すのみで、文化財保護のうえから憂慮すべき事態が生じていた。発掘調査の結果、溝は弥生時代中期前半のＶ字溝で、丘陵北端にまで続く可能性が予想され、溝と同時期の住居跡らしい竪穴状遺構と、葺石をもつ径約11.5ｍの円墳が新たに発見された。

造成工事は、調査後、諸事情により中断していたが、その後、新たに資材置場にするために工事を行うことになった。町教育委員会では、事業者と協議を行い、工事再開前に記録保存の措置をとるための発掘調査を行うことになった。前回に続いて町教育委員会が調査主体となり、調査は、宮崎県文化財保護審議会委員石川恒太郎、同日高正晴、博物館主事面高哲郎、文化課主事北郷泰道、有田辰美氏の計５名が担当した。調査に先だち、調査員会で調査方法の観点について検討会を開き、古墳の調査は規模や内部主体の確認に主眼をおき、将来の保存等について影響を与えない範囲で行うことになった。調査は、昭和56年３月13日から同年３月27日まで実施された。

Ⅱ　調査の記録

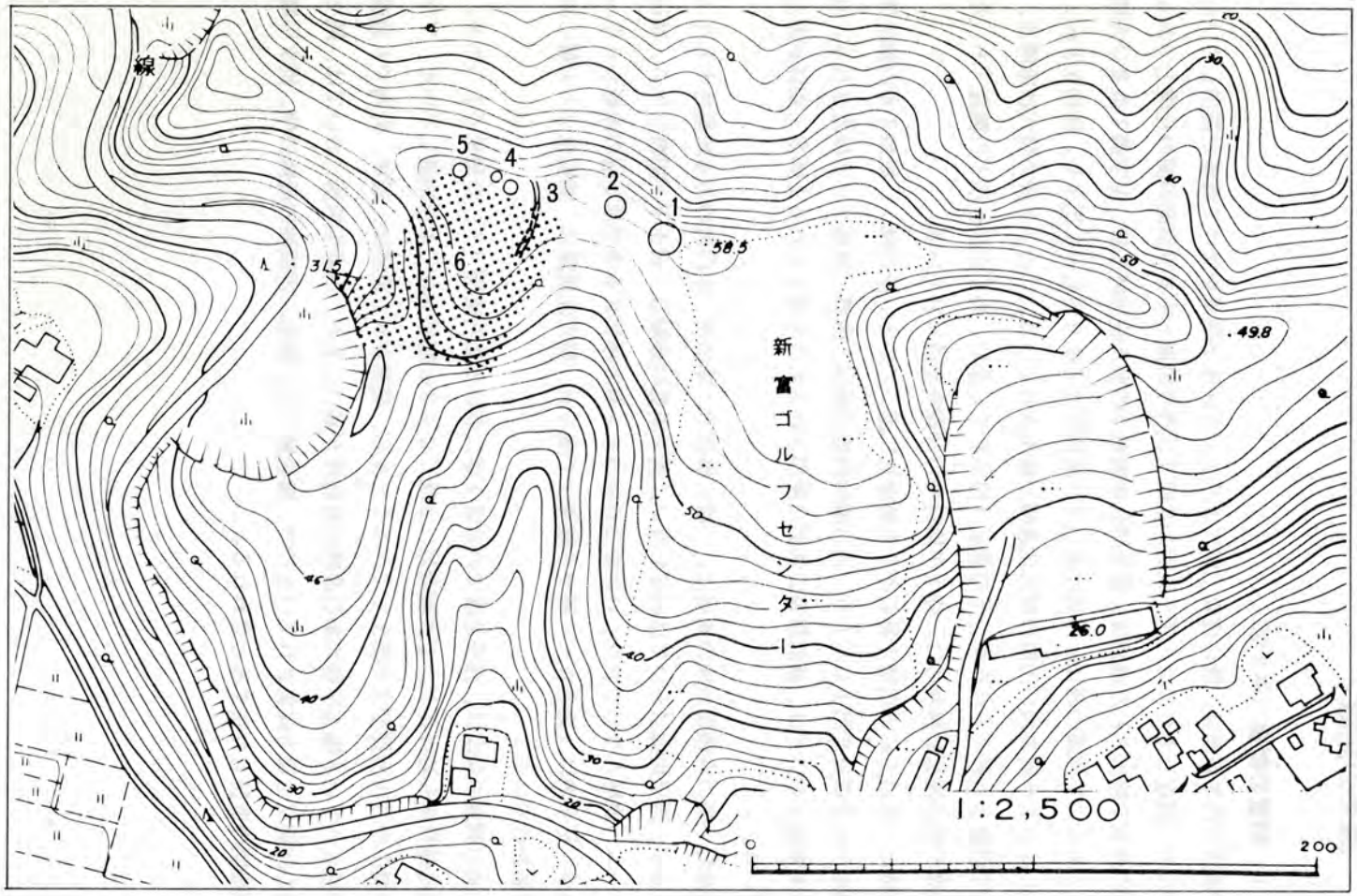
1．調査の概要（第２図）

鐙遺跡の西平坦面は、既に造成工事により２～３ｍほど削平を受けて礫層が露出していた。そのため、調査しえたのは、西平坦面の北縁及び西平坦面と中央平坦面の間の丘陵上である。２回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期前半の竪穴住居跡２軒、Ｖ字溝１条及び古墳１基である。Ｖ字溝の西10m付近において、遺物がまとまりをもって出土し、径約3.5ｍ、と　２ｍの２ケ所の浅い円形の竪穴状遺構が検出されている。この２ケ所の竪穴状遺構は、竪穴住居跡とも考えられたが、その確証は得られていない。わずか10mほどの調査であったＶ字溝や竪穴住居跡等からは、弥生中期前半の好資料が得られている。

古墳は、径11.5ｍの円墳で葺石が２条鉢巻状に巡っている。蛇行剣１、鉄鏃１が内部主体と推定される部分で出土しており、当古墳の内部主体は、直葬（木棺？）と推定される。古墳の南東裾においては、墓前祭等の祭祀に使用されたものと考えられる土師器・高杯が出土している。

新富町一帯の洪積世台地の地層は、一般に黒色土、赤ホヤ、小白斑のある暗褐色土となっているが、西平坦面においては存在しない。西平坦面の地層は、表土下が褐色ローム、淡褐色ローム、礫層となっており、いわゆる日向ローム層と呼ばれる中では下層の地層からなっている。Ｖ字溝は、褐色ローム層から礫層まで掘られ、竪穴住居跡は、淡褐色ローム層に床面が築かれている。

今回の調査の発端は、西平坦面での造成工事において集石遺構（？）の発見であったが、工事は発見後も続行され、１次調査時には既に２～３ｍ削平されており消滅していた。Ｖ字溝の埋土から山形押型文が出土していることから、発見された遺構は、近年、町内でも数遺跡発見されている縄文早期の集石遺構の可能性が高い。また、中央平坦面においては、縄文後期の沈線文土器も採集されているので、鐙遺跡には、弥生、古墳期の遺跡の他、縄文早期及び後期の遺跡も存在すると思われる。



第2図　遺構分布図　1. 古墳　2. 1号住居跡　3. V字溝　4. 竪穴状遺構　5. 2号住居跡　6. 造成区

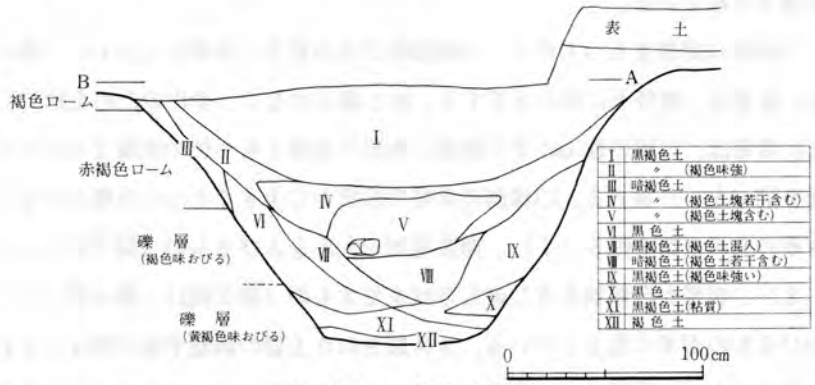
2．弥生時代

（1）Ｖ字溝

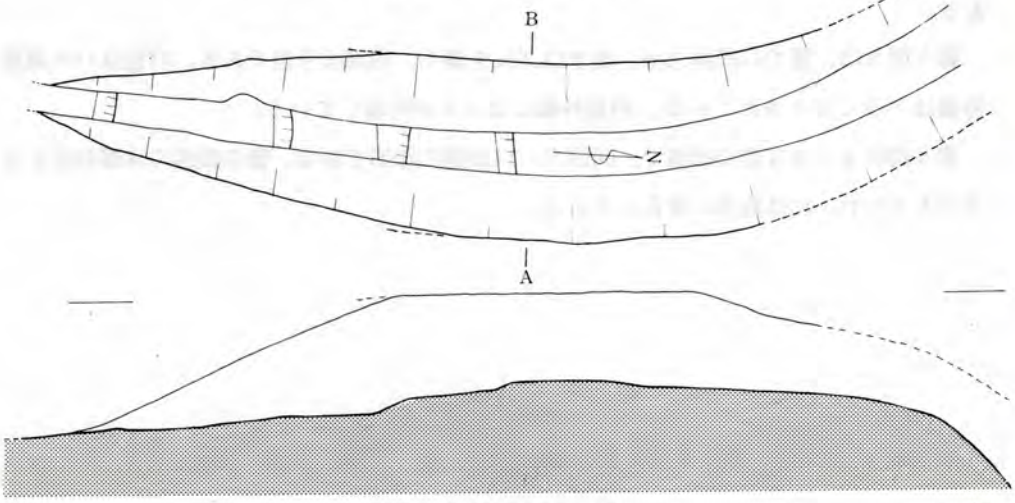
遺　構（第３・４図）

溝は、当初、造成工事区内において西平坦面の東縁を弧状に20m ほどが確認されていたが、発見後も工事は続行されたため調査着手前に大半が消滅し、調査しえたのは溝北端10m のみである。平坦面西縁においては溝の痕跡は確認されていないので、溝は東縁のみを走行し、その全長は少なくとも30m はあったものと考えられる。

溝は、断面Ｖ字状をなすＶ字溝で礫層まで掘り込まれている。上幅約 260cm、底幅約60cm、深さ約 150cmが計測される。底面レベルは、調査した溝の中ほどを最高位として、南半は、段差はわずかであるが階段状に下向している。北端は北傾斜面まで続き、急傾斜をなして下向する。



第３図　Ｖ字溝土層図



第４図　Ｖ字溝実測図

溝の埋土は、上層黒色土、中層茶褐色土、下層はやや粘質の黒褐色土に大別され、遺物は大半が中層において出土し、下層においては少片が若干出土したのみである。

遺　物（第５・６図）

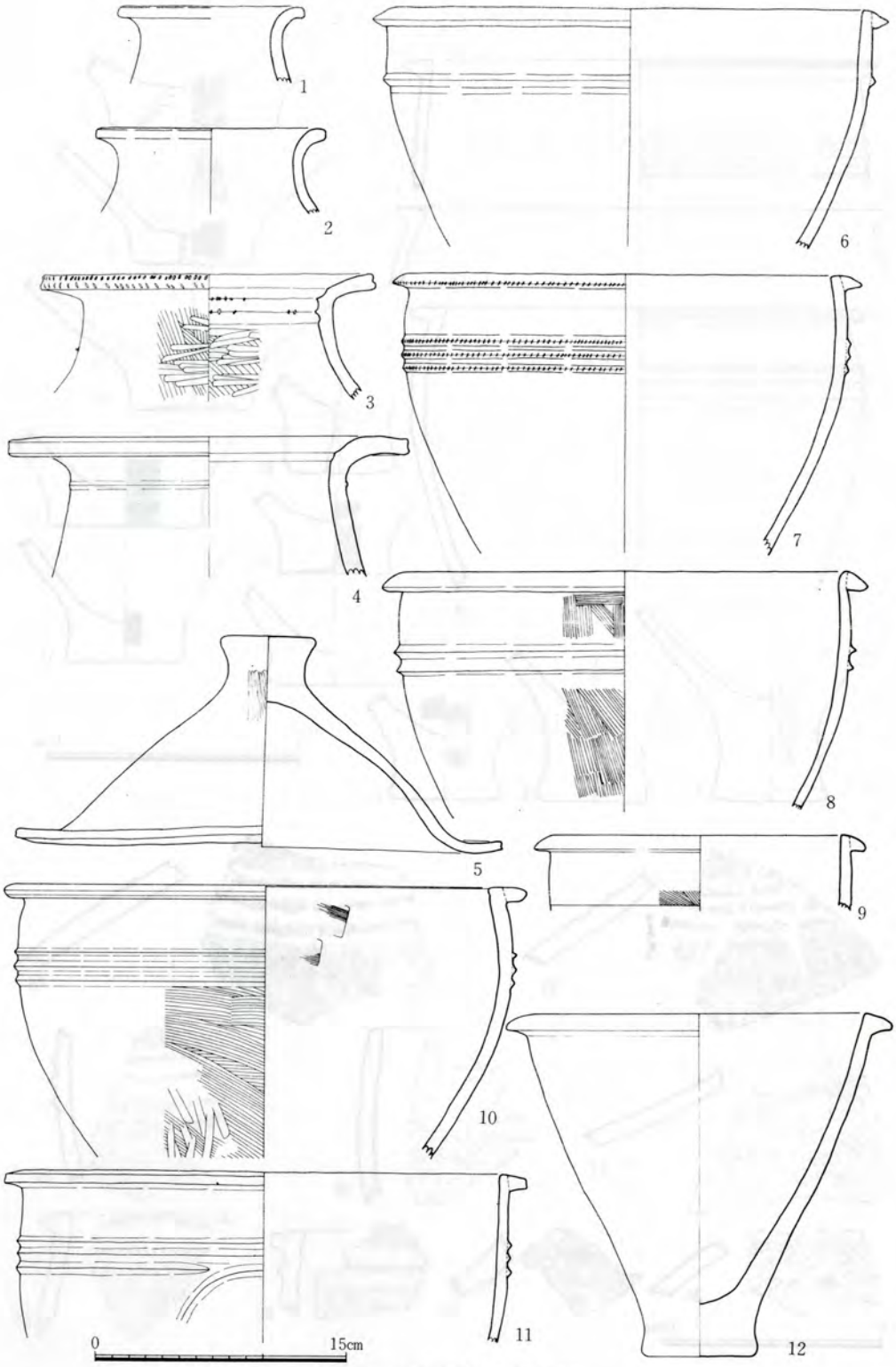
出土遺物は土器が中心で、石器は、太形蛤刃石斧１点のほかはほとんど出土していない。土器は、甕、壺、蓋があり、甕の占める比率が大きい。

壺は、外反する単純な口縁をもつもの（第５図１、２）内湾ぎみに内傾して口縁部が大きく外反し、内面に突帯をもつもの（第５図３、４）がある。３は、内面突帯上に部分的に刻みをつけ、口唇部には羽状に刻みをつけている。ハケ調整後ヘラ磨きしている。第６図15、16は、壺の肩部に３条の突帯があり、同17、20、21は肩部に沈線がみられる。21は沈線間に列点文が施文されている。

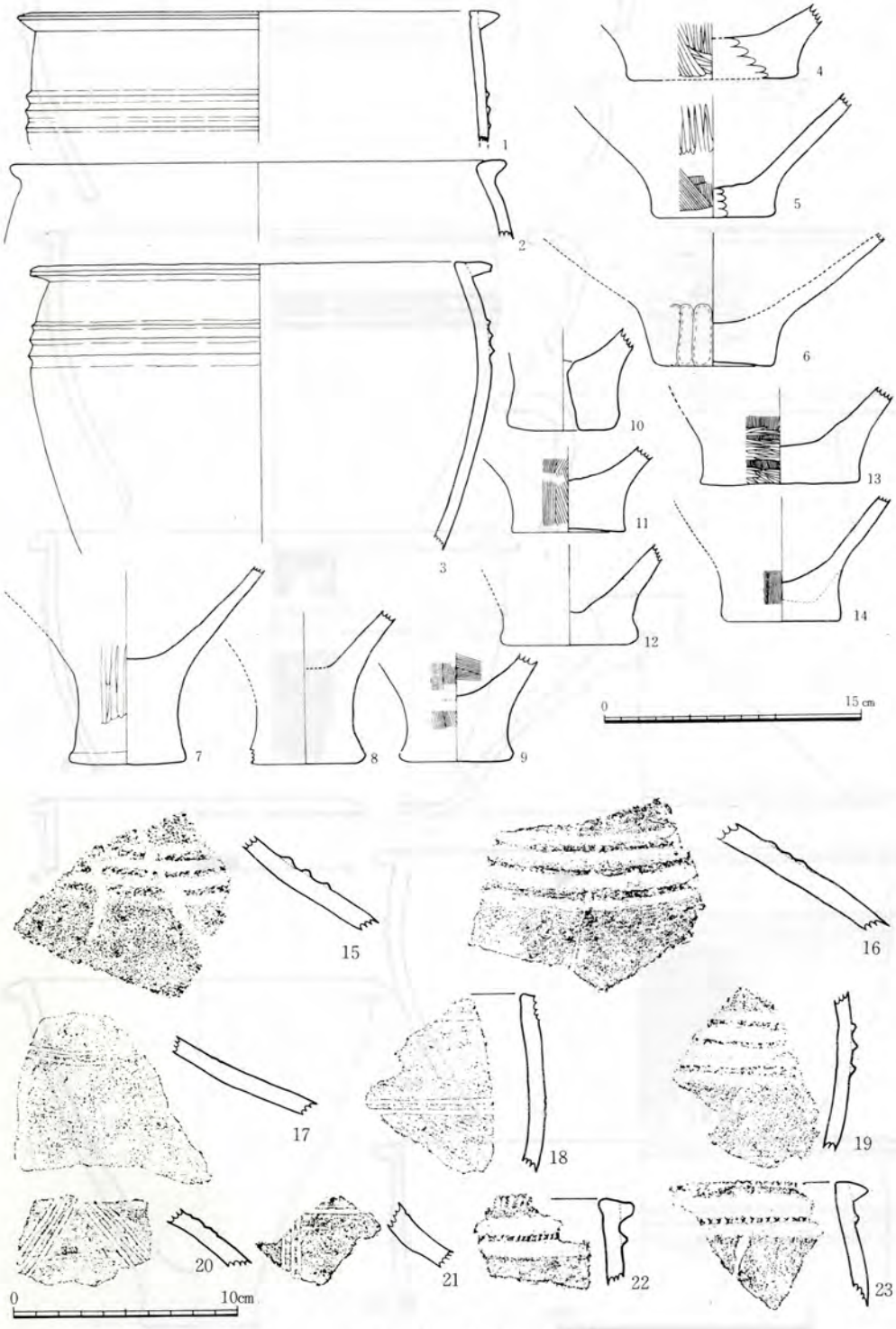
甕は、口縁部に突帯をもつものと、口縁部及びその直下に突帯をもつもの（第６図22、23、）がある。後者は、突帯上に刻みを有する。出土量は少なく、少片のため全形については不明である。前者は、口縁の数 cm 下に断面三角形の突帯をもつのや沈線文をもつもの（第５図９、第６図 18　）等ある。口縁部の突帯の形状から大きく３つに分類される。突帯端部が尖りぎみのもの（第５図６、７）、突帯端部が丸みをおびるもの（第５図８、９、12、第６図１、２）、突帯が台形状をなし逆Ｌ字状をなすもの（第５図11、第６図３）に分類され、丸みをおびるものが多く出土している。３分類された土器の調整手法の差はみられない。内面はナデ調整である。外面はハケ調整を主体しながら胴部上はハケ後ヨコナデされたものもある。

第５図５は、蓋で口径24.2cm、高さ12.5cmを測り、頂部は平坦である。内面はハケ調整で外面はヘラミガキされている。内面外輪にはススが付着している。

第６図の４～６は壺の底部で、同図７～14は甕の底部である。甕の底部には脚台状をなすものもみられ、10は底部に穿孔している。



第5図　V字溝出土遺物(1)

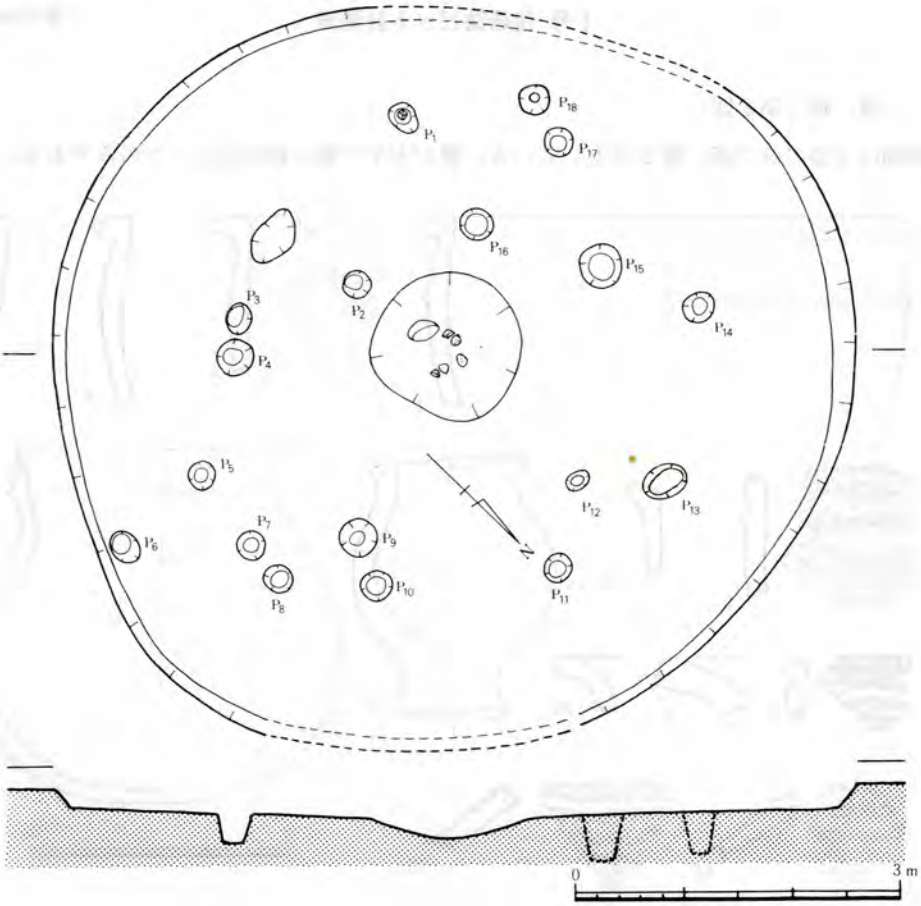


第6図　V字溝出土遺物(2)

（2）１号住居跡

遺　構（第７図）

１号住居跡は、第１次調査の際、竪穴の一部が確認されていた住居跡で、Ｖ字溝東20m、中央平坦面と西平坦面の中ほどに位置する。不整円形プランの竪穴住居跡で長径 7.4m、短径 6.9m の規模を有する。床面は、立地が南への傾斜地のためか南へ若干傾斜している。壁は、約60度で立ち上がり、壁高は20～25cmを測る。住居跡中央部では、径約 1.4m の円形の凹みが検出され、中に河原石６個があった。凹み内では焼土や炭化物が認められたことから炉として使用されたものと考えられる。この他、径40～25cmの円形ピットが18個検出され、深さは10～40cmを測り、30cm前後のものが多い。このピットは柱穴と考えられるがその配列は不明である。



第７図　１号住居跡実測図

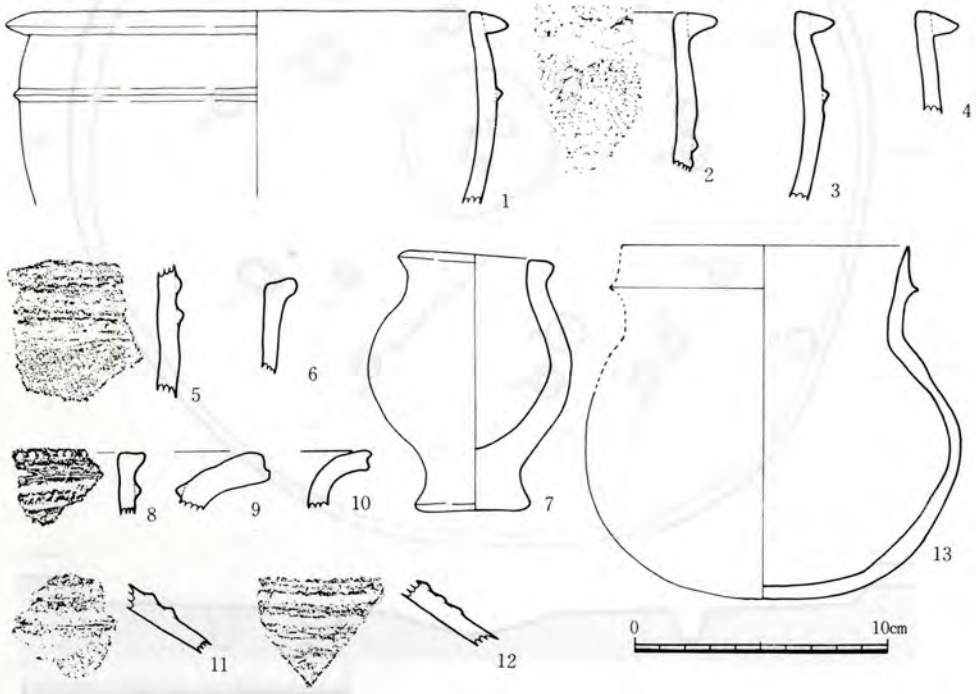
遺物は、住居の規模のわりに少ない。床面において小形の完形甕形土器が倒横の状態で出土し、住居跡北西壁の表土直下において伽耶製と推定される陶質土器が出土している。この陶質土器は、当丘陵性台地上に分布する古墳に伴うものである。

番号	径	深　さ	番号	径	深　さ	番号	径	深　さ	番号	径	深　さ
1	長径32	16	6	長径33	68	11	25	26	16	31	22
2	26	7	7	25	24	12	22	28	17	25	42
3	長径30	29	8	29	35	13	長径42	30	18	30	11
4	39	28	9	46	20	14	28	34			
5	25	38	10	30	20	15	41	39			

1号 住居跡ピット計測表　　(単位cm)

遺　物（第8図）

遺物は土器のみで壺・甕が出土している。甕が大半で壺は数点出土したのみである。9は



第8図　1号住居跡出土遺物（13は陶質土器）

内面に突帯をもつ口縁部で、10は、外反する口縁で口唇部に沈線がみられる。

甕は、口縁部に端部が丸みをおびる突帯をもつもの（1～4）が出土している。2は突帯間に弧状の沈線がみられる。内外面ともナデ調整である。6は、口縁上面が内傾し、内面はナデ調整である。8は、口縁部及びその直下に突帯をもち、突帯上には刻みが施されている。7は、口縁部に突帯をもつ小形の甕である。口縁上面はほぼ平坦で脚台状の底部をもつ。口径 5.1cm、器高10cmを測る。

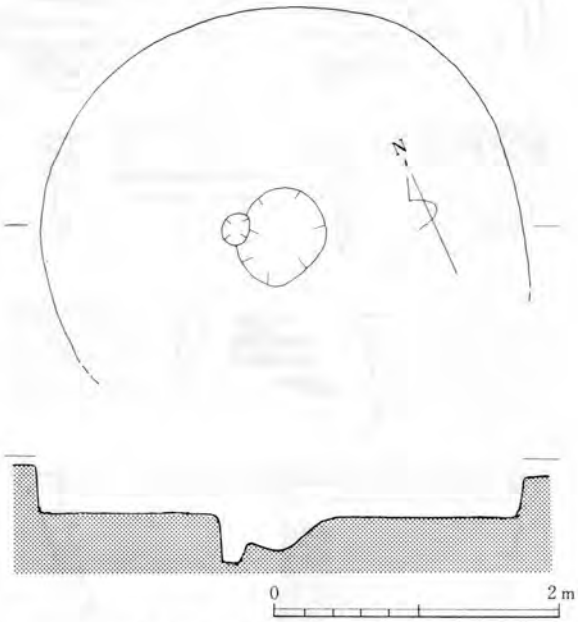
13は短頸壺の陶質土器である。口縁部は先細りで上面は平坦となっている。頸部に一条の突帯が巡り、胴部はいびつな球形である。肩部及び口縁内面に灰かぶりがみられる。口径約11.3cm、器高10cmを測る。胎土は赤茶色を呈する。

（3） 2号住居跡

遺　構（第9図）

2号住居跡は、V字溝西20m の西平坦面北縁に位置する。住居跡は工事のり面で確認され、南半分は消滅している。平面形は不整円形を呈し、規模は径約 3.3m を有する。壁高は約30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。住居跡中央部では、径約55cm、深さ24cmの円形ピットが、その北西に隣接して径22cm、深さ34cmの円形ピットが検出されている。小円形ピットは柱穴で2号住居跡は、1本柱の住居とも考えられるが定かでない。

遺物は、住居跡西半部の円形ピット周辺で土器を中心とし、石器が数点出土している。



第9図　2号住居跡実測図

遺　物（第10、12図）

遺物は土器中心で、石器は砥石、軽石製品が出土している。土器は壺と甕があり、壺の出土量は少ない。

壺は、大きく外反する口縁をもつタイプである。1、3は口唇部に刻みが施され、2は内面に突帯がある。5、6は肩部で数条の突帯があり、5は刻み目突帯となっている。

甕は、口縁部とその直下に突帯をもつタイプが大半を占める。7、8は、口縁部の突帯が直下の突帯に比較して極端に長く、口縁上面は外傾する。7は口縁3cm下に3条の断面三角形の突帯をもつ。9～12は、口縁及びその直下に突帯があり、口縁上面は12以外は平坦である。いずれも突帯上に刻みが施されて、12は縦位の沈線が2条みられる。7～12は内外面ともナデ調整である。13は、口唇部が外傾し、口縁下に刻み目突帯をもつ。14、17は、口縁部

第10図　2号住居跡出土遺物

に刻み目突帯をもち、内面がわずかに盛り上がっている。内面ナデ、外面ハケ調整である。15、16、18、19は甕の胴部で刻み目突帯がある。15は2条の沈線が斜走している。

20～22は平底ないしあげ底の底部で20、21が甕、22が壺の底部と考えられる。

第12図6は、16cm×10.5cmの長方形状の砥石で厚さ約4cmである。両面とも使用されているが、片面は特に使用されている。同図7は、6cm×9cmの隅丸長方形状の軽石製品で中央に幅1.5cm、深さ1cmの溝が横断している。

（3）その他（第2図）

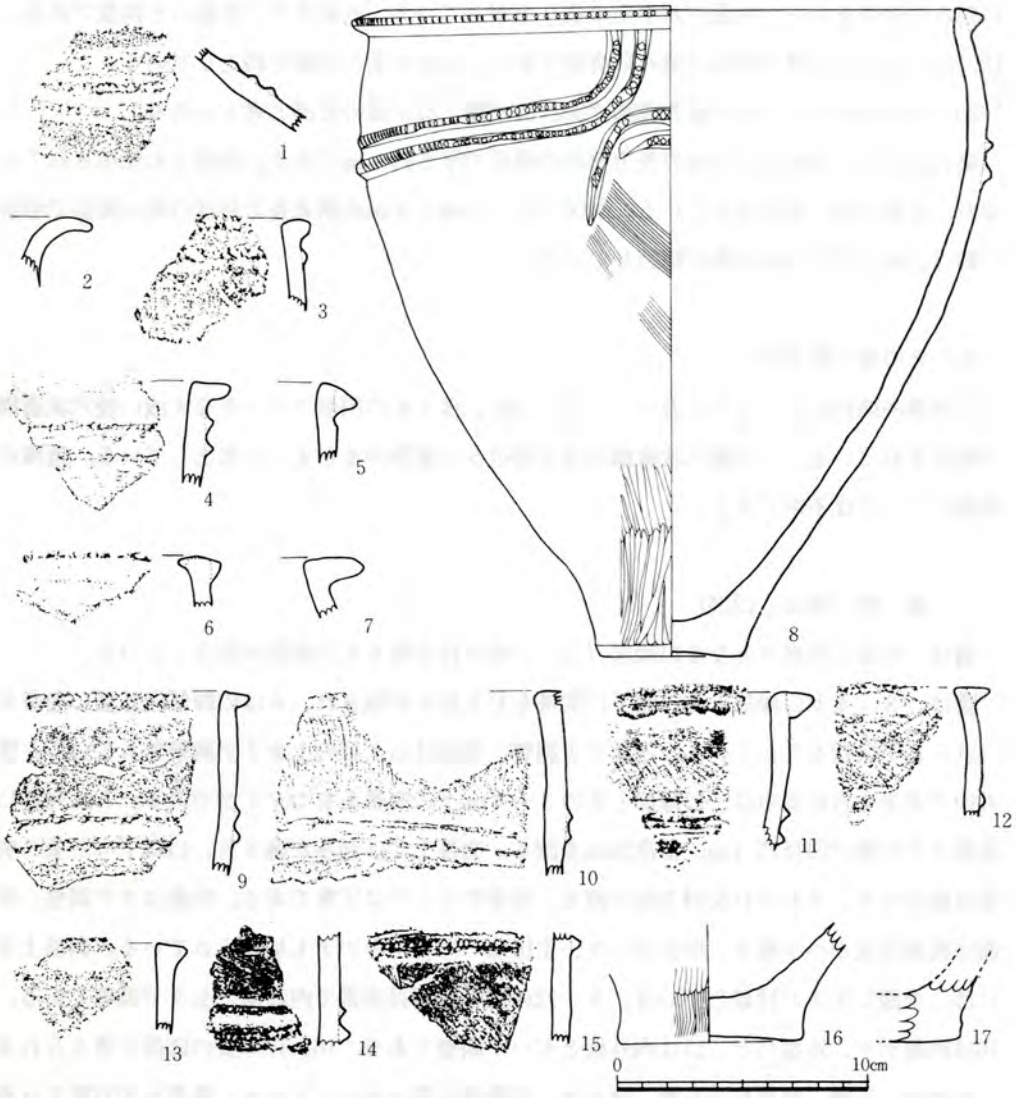
V字溝の西10mのところにおいて、径3.5m、径2mの円形プランをなす浅い竪穴状遺構が検出されている。この竪穴状遺構内及び周辺から遺物がまとまって出土している。遺構の性格については不明である。

遺　物（第11、12図）

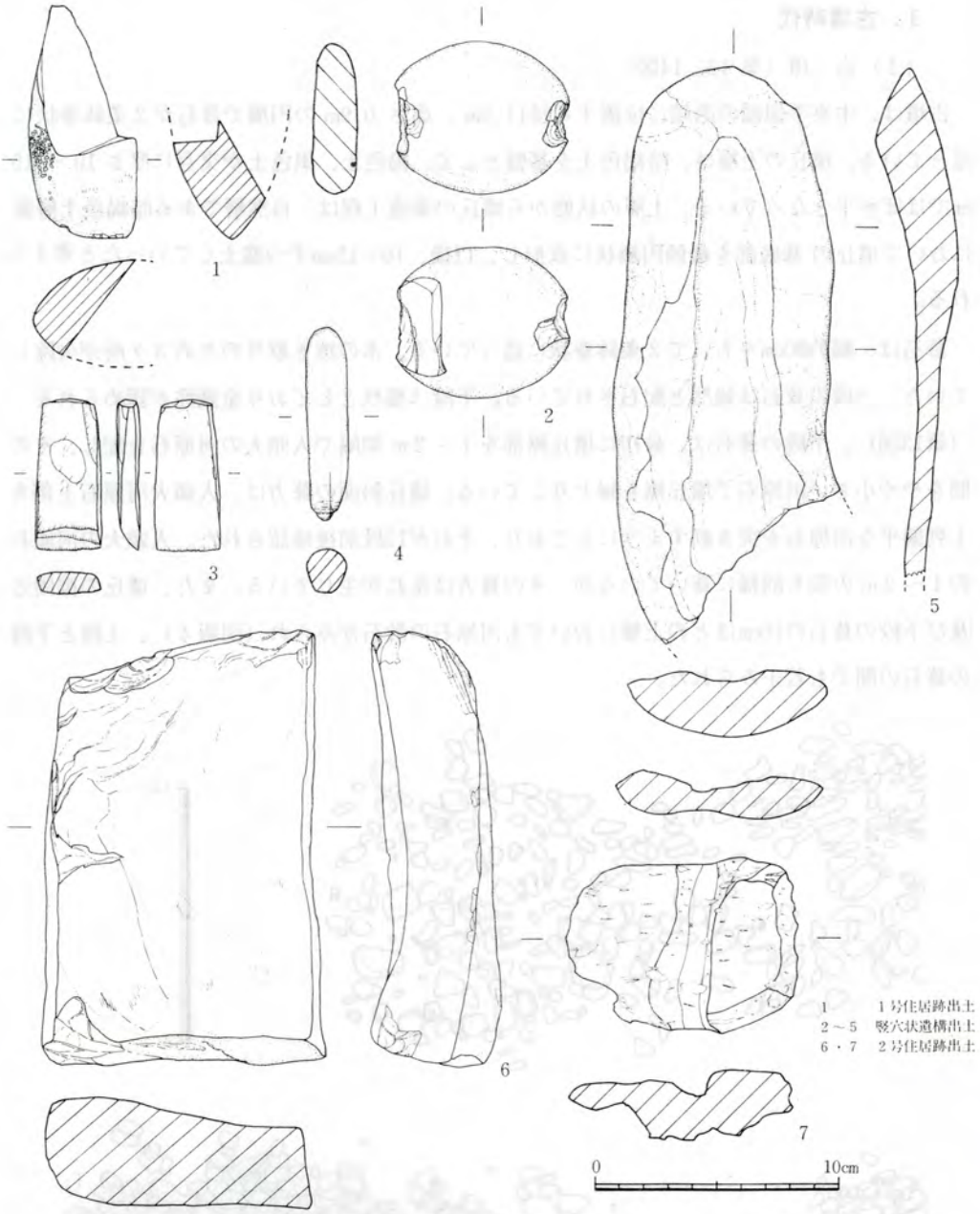
壺は、外反し先細りとなる口縁部（2）、刻み目突帯をもつ肩部が出土している。

甕は、3、4が口縁部とその直下に突帯をもち刻みが施され、6は口縁部内外面に突帯がつけられT字状をなしている。内面ナデ調整、外面はハケ目の上をナデ調整されている。甕の中で大半を占めるのは、口縁部とその3～4cm下に突帯をもつタイプである。8は完形に復原された甕で口径25.1cm、器高26cmを測る。突帯上には刻みが施され、口縁下の2条の突帯は結合せず、それぞれ反対方向で終る。突帯のつくりは丁寧である。内面はナデ調整、外面は底部付近がヘラ磨き、中位がハケ、上位はハケの上をナデも加えられている。胴部上半には、全面にススが付着している。9、12の突帯は刻目突帯で内外面ともナデ調整である。10は内面ナデ、外面ハケ、11は内外面ともハケ調整である。16、17は甕の底部と考えられる。

石器は、石錘、扁平片刃石斧、穿孔具、石鍬様石器が出土している。扁平片刃石斧3は長さ6.2cm、刃部幅3.5cm、厚さ約0.9cmである。穿孔具4は断面変楕円形で棒状の形態で一端に口転痕を残し、半球形状の先端となっている。5は石鍬様の形態で現長23.5cm、幅9.1cmを測る。反りが見られ、中央部には溝もつけられている。



第11図　竪穴状遺構出土遺物



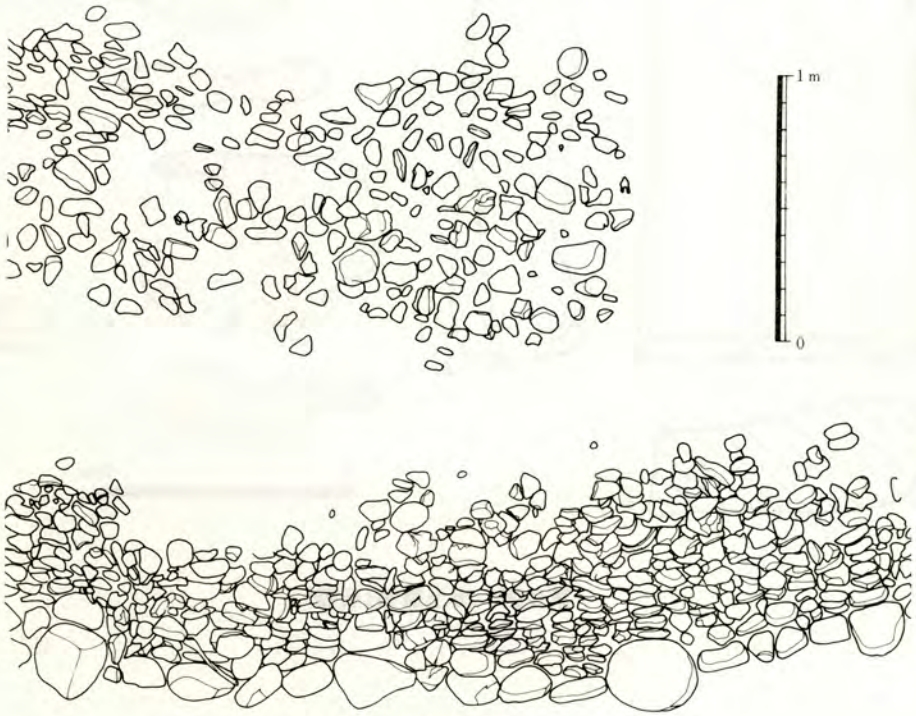
第12図　出土遺物(石器)

3．古墳時代

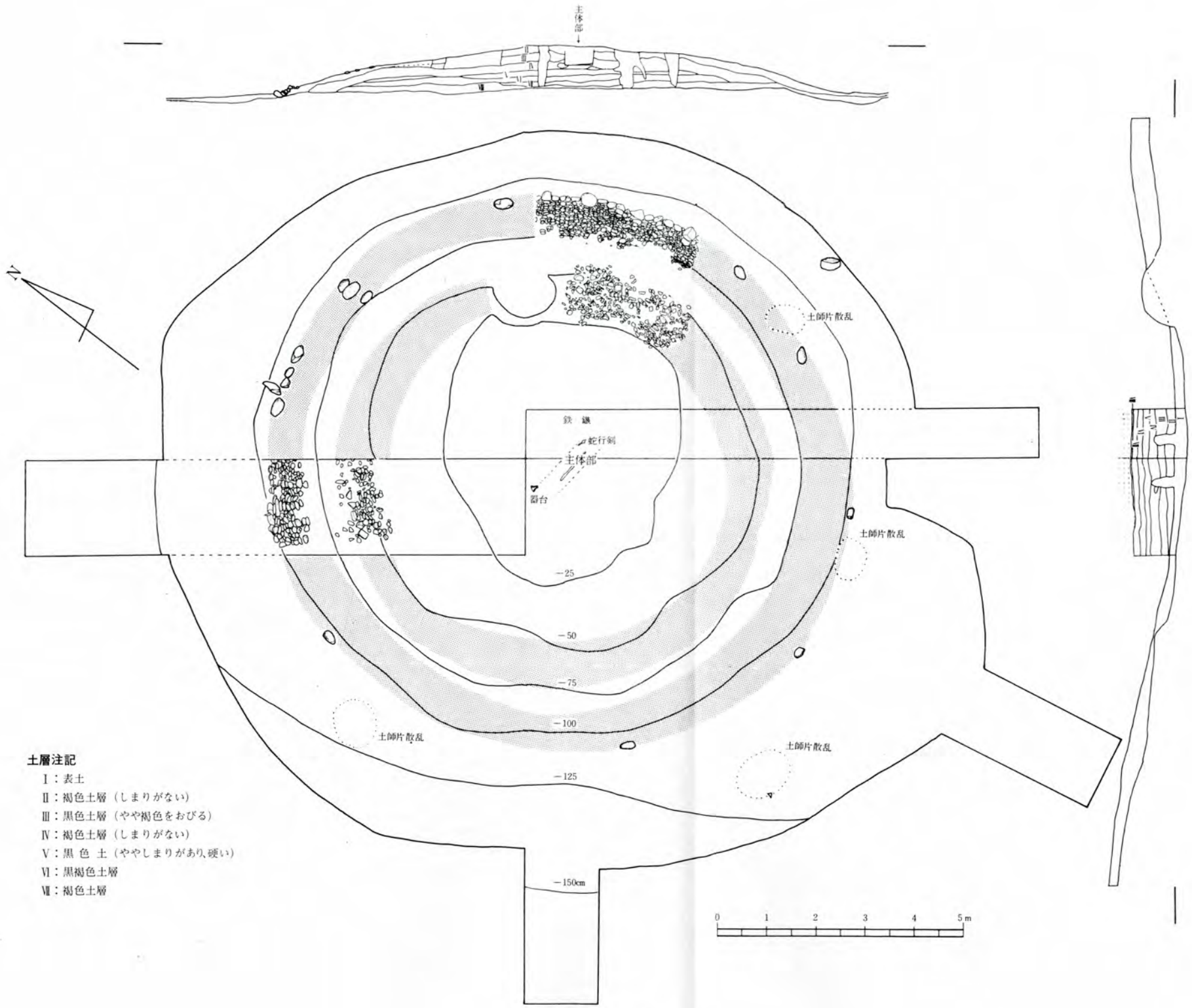
（1）古　墳（第 13、14図）

古墳は、中央平坦面の西端に位置する径11.5m 、高さ 0.9m の円墳で葺石が２条鉢巻状に巡っている。墳丘の土層は、暗褐色土を基盤として、褐色土、黒色土が交互に厚さ 10 ～ 15 cmでほぼ水平となっている。土層の状態から墳丘の築造工程は、自然層である暗褐色土層面において墳丘の 基底部を截頭円錘状に成形し、以後、10～15cmずつ盛土していったと考えられる。

葺石は、幅約80cmをもって２条鉢巻状に巡っている。木の抜き取りのため３ケ所が欠除していた。上段の葺石は雑然と配石されている。下段は整然としており企画性が認められる（第13図）。下段の葺石は、最初に墳丘裾部を１～２m 間隔で人頭大の河原石を配し、その間をやや小さい河原石で墳丘裾を縁どりしている。墳丘斜面の葺方は、人頭大河原石上部を１列偏平な河原石を突き刺すようにしており、それが12段前後確認された。人頭大の河原石の１～２m の間も同様に葺いているが、その葺方は乱れが生じている。また、墳丘の裾周辺及び下段の葺石の10cmほどの上層においても河原石の散石がみられ（図版４）、上段と下段の葺石の間でも若干みられた。



第13図　北東部の葺石平面図



土層注記

Ⅰ：表土
Ⅱ：褐色土層（しまりがない）
Ⅲ：黒色土層（やや褐色をおびる）
Ⅳ：褐色土層（しまりがない）
Ⅴ：黒 色 土（ややしまりがあり、硬い）
Ⅵ：黒褐色土層
Ⅶ：褐色土層

第14図　古墳実測図

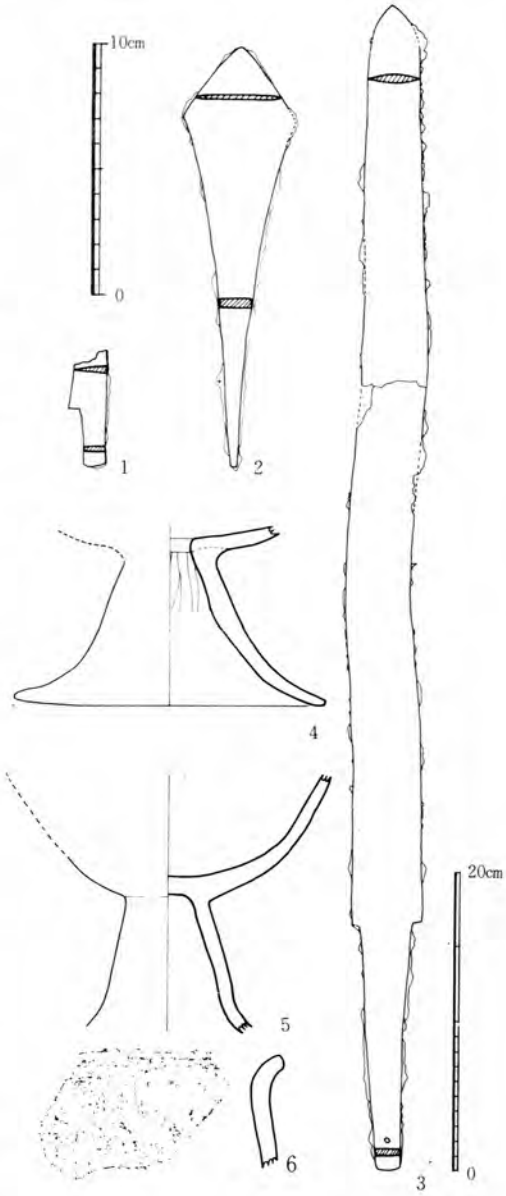
古墳の内部主体は、平面的には検出されていないが、東西断面の墳丘のほぼ中央部において、幅 60 cmのU字形の落ち込みが確認された。その底と同レベルにおいて鉄鏃が1点出土し、また、 25 cm上において蛇行剣が1点出土している。その方向は東西である。幅 60 cmで確認されたU字形の落ち込みを蛇行剣の方向で幅を推定すると45cmの土壙となる。したがって、古墳の埋葬法は直葬と考えられる。木棺の使用については、土壙上位に副葬された蛇行剣がほぼ水平に出土し、原位置を保っているとも考えられるので確証はない。推定土壙線に隣接して、墳丘上部で土師器・器台が1点出土している。

遺物は、この他、墳丘の東、南南東、南南西、北の4ケ所の裾部において、散石の間及び下部において墓前祭等の祭祀として使用されたと考えられる高杯などの土師器が少片が出土している。また、墳丘の盛土から如意形口縁に類似する口縁部が短く外反し、胴部が若干はる弥生の甕片が1点出土している。（第15図6）

遺　物（第15図）

蛇行剣（3）

身がほぼ中央で1回蛇行する全長77.8cmのいわゆる蛇行剣である。身長61.2cm、身幅は中央部で 4.2cmを測る。厚さは、さびぶくれのため正確には計測されないが現厚 0.6cmである。茎の長さは16.6cmで目釘穴が1ケ所ある。



第15図　古墳出土遺物

鉄鏃（2）

変形圭頭斧箭式で全長16.9cm、鏃身最大幅 4.5cmを測る。茎に矢柄の痕跡は認められない。

刀子（1）

現長 4.7cm、茎長 2.3cm、身幅約 0.9cmを測る。

高杯（5）

杯部は深い半球形をなし、脚はやや短く、裾部は外反する。杯部に脚部の接合は、杯部を挿入する方法をとっている。器壁は風化のため手法は不明

器台（4）

杯部底部に穿孔があり器台と考えられる。脚部はラッパ状に開き、内面上部にしぼりがみられる。脚裾部の径12.4cmを測る。

Ⅲ 結 語

2回にわたる鐙遺跡の発掘調査により弥生時代及び古墳時代の遺構が検出されている。弥生時代の遺構は、竪穴住居跡2、竪穴状遺構2、V字溝1があり、各遺構からは、土器を中心とした遺物が出土している。土器は甕、壺、蓋があり、甕の出土率が高い。甕の形式は、各遺構により差がみられる。出土状態が住居跡、竪穴状遺構においては床面及びその付近であり、V字溝においては中層において集中して出土していることから、各遺物は一時期の一括資料として把握できるものと考える。そこで、鐙出土の土器を次のように分類する[1]。鐙Ⅰ類として、第2号住居跡生土の土器をあげたい[2]。Ⅰ類土器の甕は口縁部とその直下に突帯上に刻みを有する。第Ⅱ類として、第1号住居跡及びV字溝出土の土器をあげる。甕は、口縁部及び数cm下に突帯をもつタイプである。突帯は、端部が尖りぎみのもの、丸いものや、台形状を呈するものがある。甕の底部は、平底、脚台状の底部である。壺は、口縁部が外反し単純な口縁を有するもの、頸部が内湾ぎみに内傾し、口縁部が大きく外反し内面に突帯を有するものがあり、前者は後者に比して小形化している。第Ⅱ類土器は、城ノ越式に類似しており、中期前半に比定される。

県内の中期初頭～前半の遺跡は、高鍋町持田中尾遺跡[3]、高崎町今村遺跡[4]がある。山中氏の編年によると[5]、この時期をⅡ期とし、Ⅱa期に下城系の甕、亀ノ甲式甕の系譜をひくと思われる内湾する胴上半部と口縁、胴部の突帯が特徴的なものをあて、Ⅱb期に、鐙遺跡の新しい様相をなすものをあて、口縁部突帯が三角から台形に変化し、横にやや拡張され倒L字化が

が進行するとしている。鐙Ⅱ類としたもののうち一部が山中氏編年のⅡbに属する。口縁部突帯が台形したものは、突帯を有する甕では新しい様相を示すので、Ⅱ類はさらには分類しうるが、2号住居跡及びⅤ字溝の出土状況からここでは一括しておきたい。Ⅱ類土器には、内面に突帯をもつ壺や沈線をもつ甕なと古い様相もみられる。

鐙Ⅰ類に類似する土器は、中尾、今村の両遺跡で出土している。鐙出土の土器は、口縁とその直下の突帯の部分のみが出土しているが、2号住居跡には、突帯を数条もつ甕の胴部も出土しおり、中尾の例などからⅠ類の甕は胴部にも突帯をもつものもあると推定される。今村には、口縁部とその直下に突帯をもつものが出土している。Ⅰ類の甕はⅡ類に先行するものと考えられる。鐙Ⅰ類は、中尾、今村出土のものに比べで稚拙さは否めない。

鐙Ⅰ類を出土する遺構は1号住居跡、鐙Ⅱ類を出土する遺構はⅤ字溝、1号住居跡、竪穴状遺構（住居跡？）があり、発見された住居跡は少ない。しかし、西平坦面は、地形及びその面積から集落が存在し、Ⅴ字構は、鐙Ⅱ類の時期に西平坦面集落を区分していたと考えられる。

鐙遺跡は、標高約58mで沖積面との比高差50mの丘陵性台地上に立地している。このような地形に立地する弥生時代の遺跡はこれまで知られていなかったが、鐙発見後、中尾遺跡が同様な地形において発見されている。この両遺跡は、弥生中期初頭～前半に中心をおく遺跡である。弥生前期の遺跡である宮崎市檍遺跡や新富町今別府遺跡は、後背地に湿地をもつ砂丘上ないしそれに類する地形上に立地している。鐙や中尾の例のように中期初頭～前半の遺跡が丘陵性台地上に立地すると、資料が少ない現在断定できないが、宮崎平野部における弥生時代遺跡の動態を考えるうえで興味深いものがある。

古墳は、径11.5mの小規模の円墳ながら、墳丘が版築であり、葺石も2条鉢巻状に巡るなど丁寧なつくりである。築造時期は、墳丘裾で出土した土師器等から6世紀前半と考えられる。古墳の発見された東のゴルフ場内には、小丘をなし、なかには葺石らしい河原石が露出しているところもある。この部分は古墳と考えられる。この他、遺跡の立地する丘陵上及びその周辺には小円墳が分布しており、葺石をもつものもある。また、一ツ瀬川河口右岸の洪積世台地や丘陵上には、多数の古墳があり、多くは小規模な円墳で小グループをなして分布している。これらは、富田古墳群[(6)]と称されている。富田古墳群の西約5kmの洪積世台地には前方後円墳22基などから成る新田原古墳群[(7)]がある。この両古墳群は、墳形、古墳の規模、立地などに差がみられ、富田古墳群は古墳時代後期に盛行する群集墳としてとらえられそうだが、今後の課題としておきたい。

註

1．土器の形式からの分類でなく、遺構出土の一括資料を鐙Ⅰ類、Ⅱ類としている。そのため、今後、形式から細分される可能性は残されている。

2．口縁部とその直下に突帯をもつ甕は除いて考えている。

3．北郷泰道、「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会　1982

4．茂山　護「今村遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（3）宮崎県教育委員会　1979

5．山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－」研究紀要No.8宮崎県総合博物館　1983

6．富田古墳群の一部、円墳60基、横穴基5基は県指定の史跡となっている。

7．新田原古墳群は、前方後円墳22基、方墳2基、円墳 186基から構成される国指定の古墳群。昭和14年、梅原末治博士により3基が発掘調査されている。全長約68.2m の前方後円墳45号墳の内部主体は横穴式石室、全長約30m の前方後円墳第42号の内部主体の床面で粘土床が発見され、金銅装圭頭太刀等が出土している。

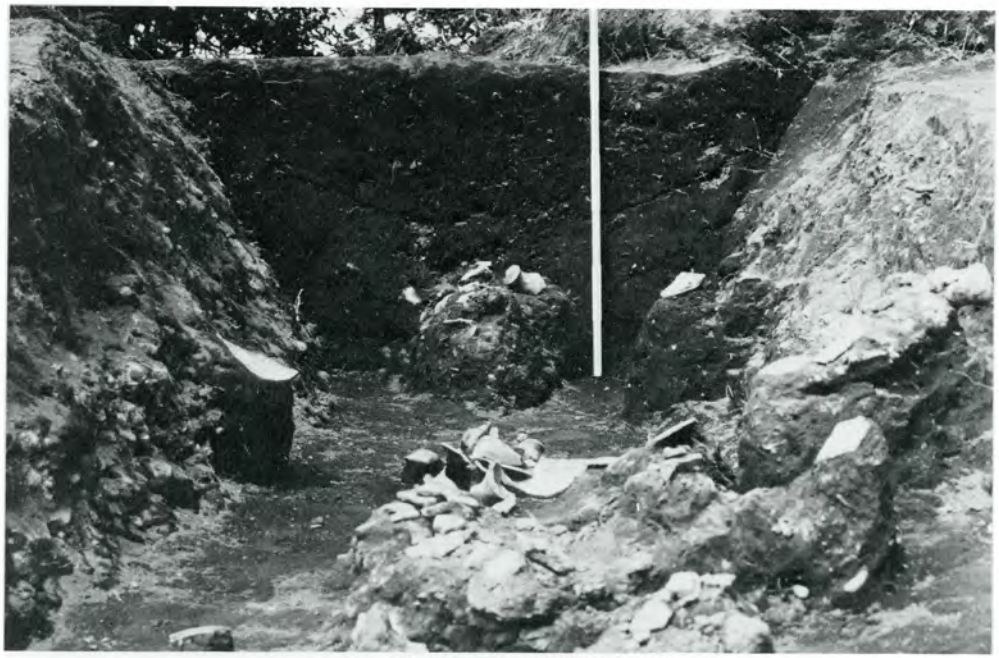
図版 1

(1) 遺 跡 の 近 景

(2) 発見当時のV字溝

図版 2

(1) V　字　溝



(2) V字溝、遺物出土状況

図版 3

(1) 1 号 住 居 跡

(2) 2 号 住 居 跡

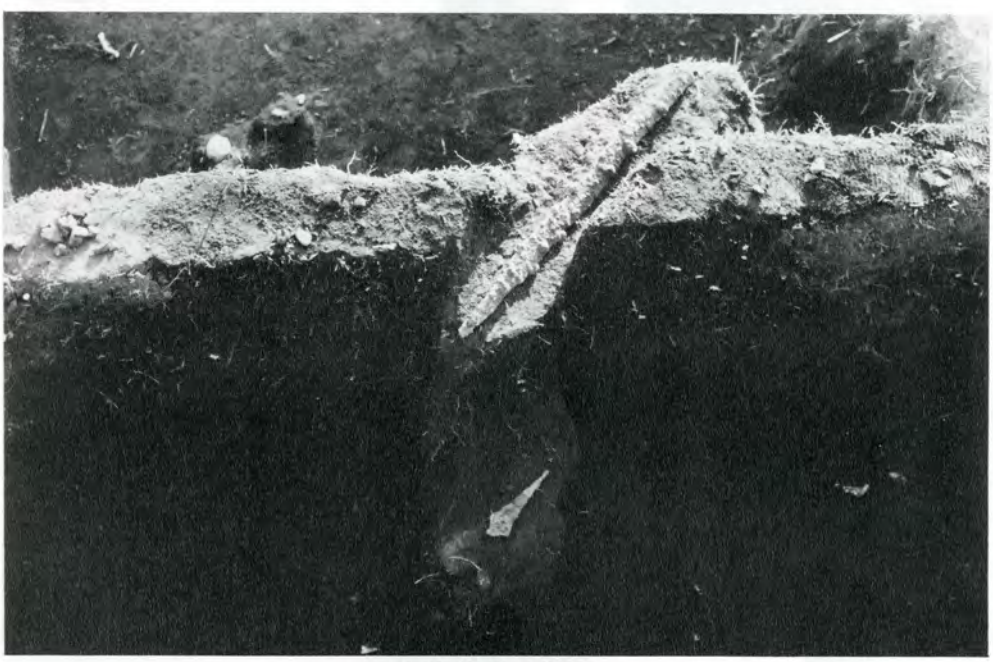
図版 4

(1) 古　墳（伐採後）

(2) 古　墳（表土を剝いだ後）

図版 5

(1) 古墳北東部の葺石

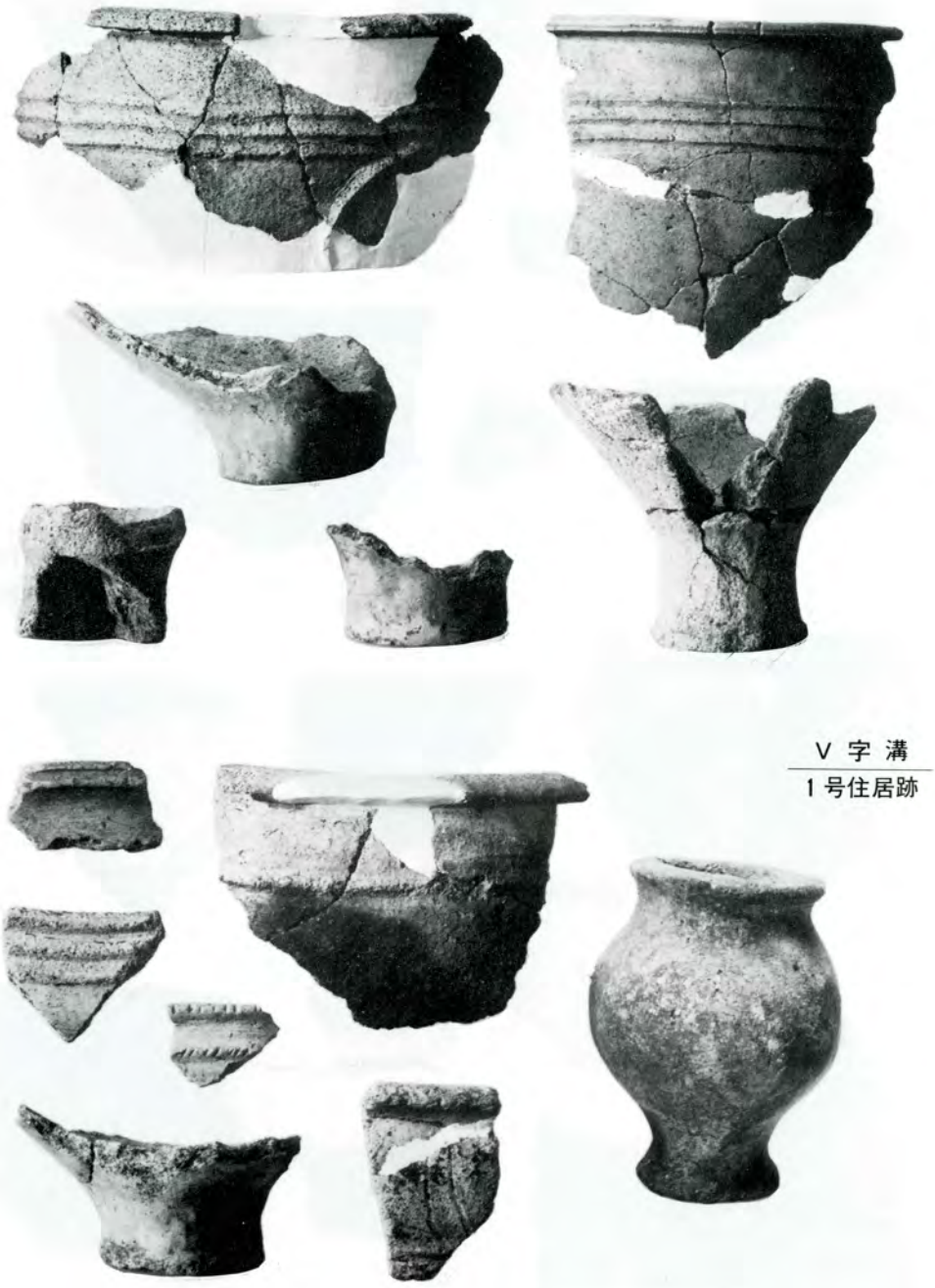


(2) 遺物出土状況

図版 6

V字溝出土遺物

図版 7

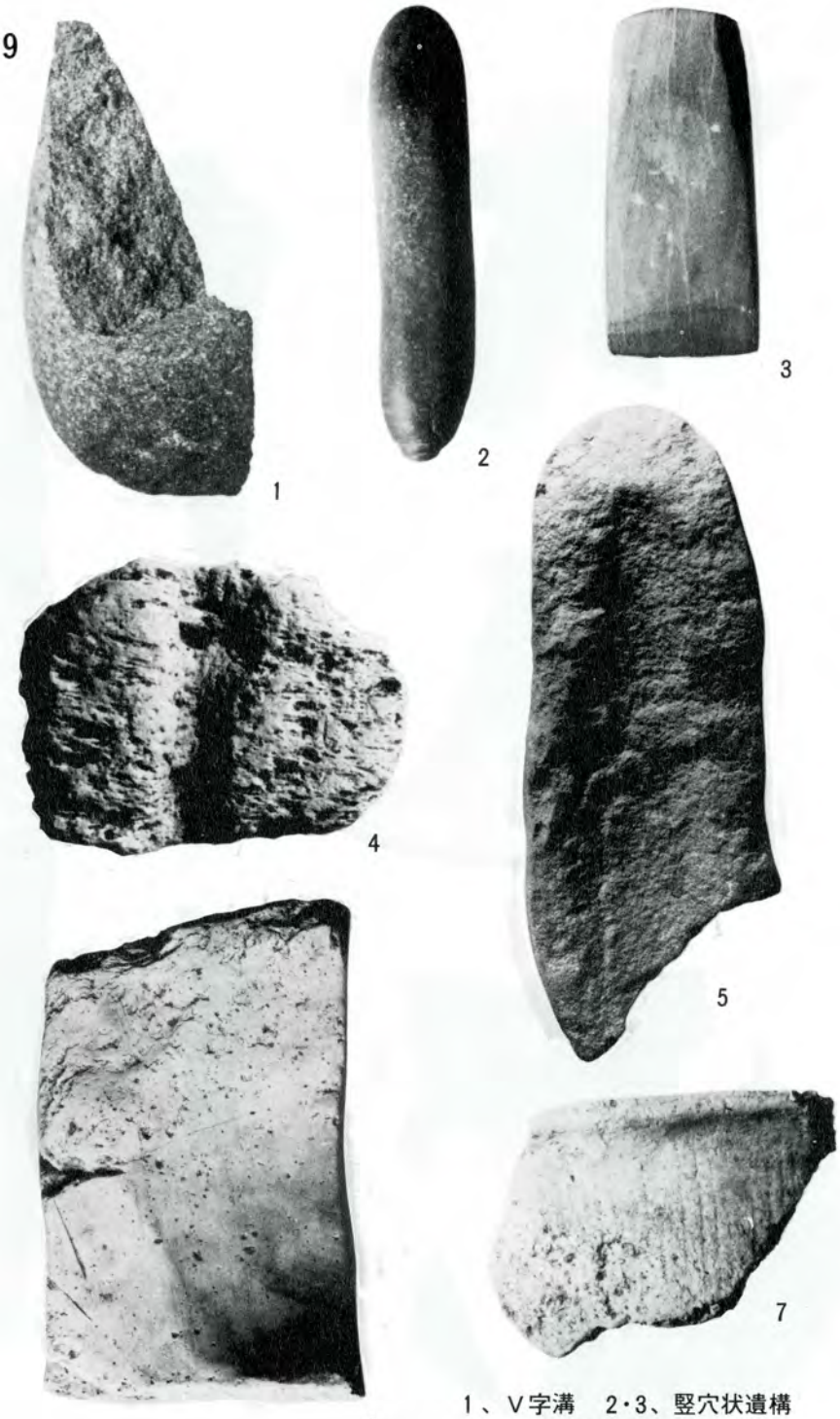


V字溝・1号住居跡出土遺物

図版 8

2号住居跡・竪穴状遺構出土遺物

図版 9



1、V字溝　2・3、竪穴状遺構
4～6、2号住居跡　7、古墳

出　土　遺　物

図版 10

1～5、古墳
6、1号住居跡

古墳時代遺物

藤　掛　遺　跡

例　　言

1．本書は新富町日置地区における農地基盤整備事業に伴い、新富町教育委員会が実施した藤掛（ふじがかり）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和56年８月27日から同年９月20日まで実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

調査主体	新富町教育委員会	
	教育長	高　松　昌　波
	社会教育課長	新　名　正　坦
	〃　課長補佐	山　本　繁　幸（現在、山崎 達男）
	文化財担当	松　原　富美彦
	調　査　員	岩　永　哲　夫 （県教育庁文化課主任主事・現在県総合博物館埋蔵文化財センター主任主事）
		有　田　辰　美
	調査協力	菅　付　和　樹 （県教育庁文化課主事）

4．遺物の実測は、埋蔵文化財センター津隈久美子氏に協力いただいた。

5．執筆は、岩永、有田が行い、文責については目次に明記している。

6．本書の編集は、岩永が行った。

7．本報告の方位は磁北である。また、レベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　説

1．発掘調査に至る経過……（岩永）……33

2．遺跡の位置と環境……（〃）……〃

3．発掘調査の経過と概要……（〃）……36

第Ⅱ章　古墳時代の遺構と遺物

1．1号住居跡……（岩永）……38

a．遺　構……〃

b．遺　物……40

2．2号住居跡……（〃）……41

a．遺　構……〃

b．遺　物……42

3．3号住居跡……（〃）……43

a．遺　構……〃

b．遺　物……44

4．4号住居跡……（〃）……47

a．遺　構……〃

b．遺　物……〃

5．5号住居跡……（有田）……48

a．遺　構……〃

b．遺　物……49

6．溝状遺構……（岩永）……〃

a．遺　構……〃

b．遺　物……50

7．その他の遺構……（〃）……55

土　拡

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物

集石遺構……（有田）……56

第Ⅳ章　結　語……（岩永）……57

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……34
第２図　遺跡周辺地形図……37
第３図　遺構分布図……38
第４図　１号住居跡実測図……39
第５図　１号住居跡出土遺物実測図（１）……40
第６図　〃　（２）……〃
第７図　２号住居跡実測図……41
第８図　２号住居跡出土遺物実測図……42
第９図　３号住居跡実測図……43
第10図　３号住居跡出土遺物実測図……45
第11図　４号住居跡実測図……46
第12図　４号住居跡出土遺物実測図……47
第13図　５号住居跡実測図……48
第14図　５号住居跡出土遺物実測図……49
第15図　溝状遺構実測図……51～52
第16図　溝状遺構出土遺物実測図（１）……53
第17図　〃　（２）……54
第18図　土坑実測図……55
第19図　集石遺構実測図（１）……56
第20図　〃　（２）……〃
第21図　集石遺構出土遺物実測図……57

図　版　目　次

図版 1　（1）発掘風景…… 59
　　（2）2号住居跡…… 〃
図版 2　（1）3号住居跡中央部…… 60
　　（2）4号住居跡…… 〃
図版 3　溝状遺構…… 61
図版 4　集石遺構…… 62
図版 5　住居跡出土土器…… 63
図版 6　溝状遺構出土土器…… 64
図版 7　遺跡見学会…… 65

第Ⅰ章　序　説

1．発掘調査に至る経過

新富町教育委員会は昭和56年度、国・県の補助を受けて遺跡詳細分布調査を実施した。

この調査は町内全域を調査対象として、遺跡の所在、分布状況、性格等を把握し、埋蔵文化財の保護を積極的に推し進めるための基礎資料作成を目的としたものであった。藤掛遺跡の発見は、この分布調査中の出来事であった。

昭和56年７月30日、日置地区の分布調査を行った際、工事中であった農地基盤整備事業地内に土師器多数が出土しているのを発見した。町教育委員会は早速事業主体者である宮崎県一ツ瀬土地改良事務所に連絡するとともに、県教育庁文化課にもその旨報告し、８月５日、現地（大字日置3616番地の25）において県文化課、県一ッ瀬土地改良事務所、町教育委員会の三者により同地が遺跡であることを確認した。その時点での遺構は全長約15m、幅50cmの溝状遺構、一辺５ｍほどの方形竪穴住居跡などであり、出土遺物から古墳時代後期のものと考えられた。

遺跡の取扱いについて、県一ツ瀬土地改良事務所と協議を重ねたが、工事計画上現状保存は困難であるとの結論に達したため、やむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになった。遺跡の発見以来、現地の保全について地元の富岡建設の方々には種々御協力いただいた。

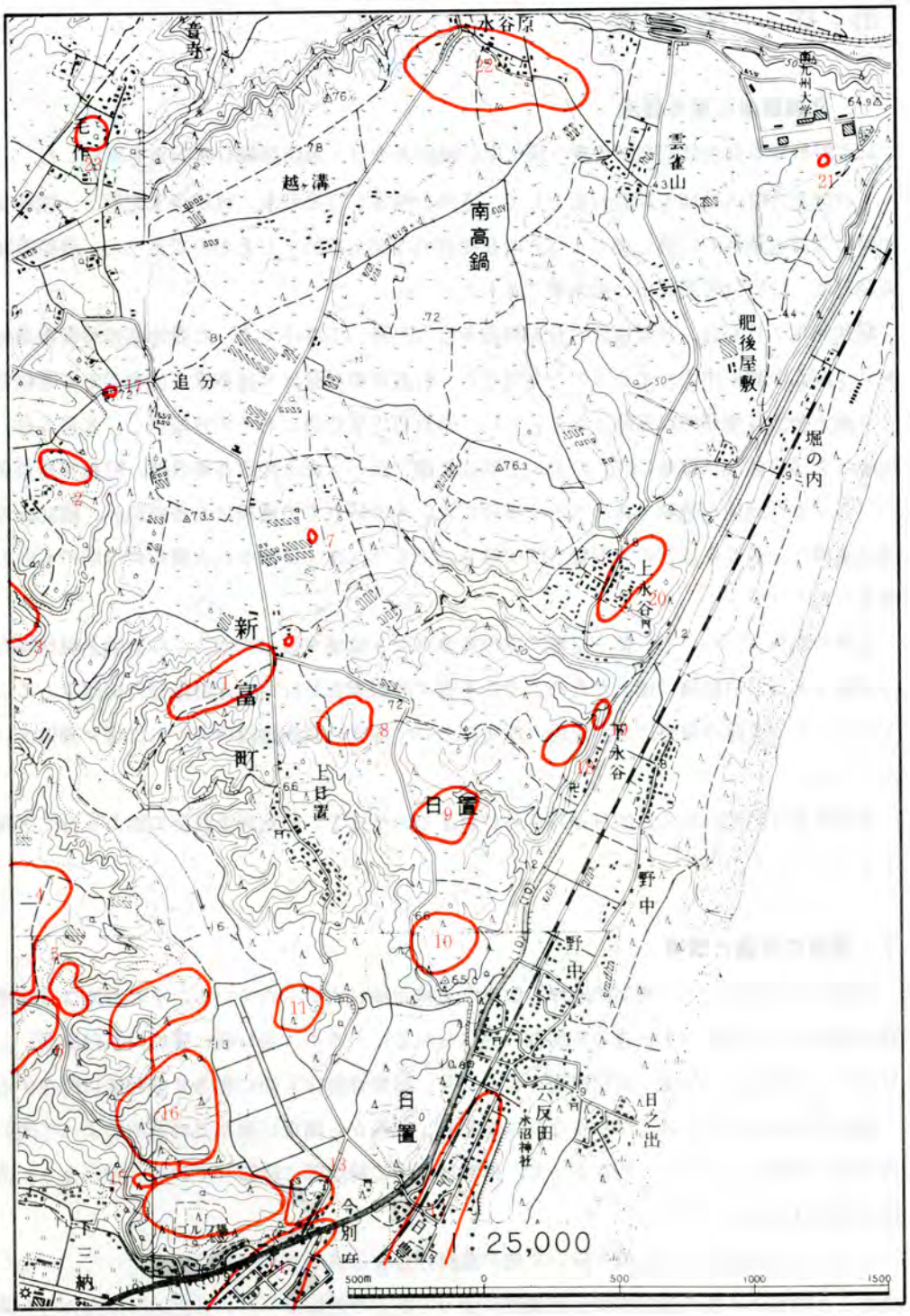
発掘調査は昭和56年８月27日から９月17日までの予定で、県教育委員会の協力を得て実施することにした。

2．遺跡の位置と環境

新富町の大部分は一ツ瀬川の北岸の広大な洪積台地に占められている。その台地は宮崎平野を構成する平坦面（Ⅰ～Ⅷの８面群に分けられる）のうち、古い順にⅦ面（茶臼原面）、Ⅵ面（三財原面）、Ⅴ面（新田原面）にあたり、[注1]藤掛遺跡はⅤ面に相当する台地に所在する。

遺跡の西から南にかけては小さな谷に刻まれ、北西から南東に流れる日置川によって南の段丘面と分断されている。したがって、遺跡は台地の縁辺部に位置していることになる。遺跡の標高は約70m である。

これまで同地周辺では古墳を除いて他の遺跡の存在はあまり知られていなかった。しかし、先述した昭和56年度の遺跡詳細分布調査によってかなり把握された。[注2]日置地区は高鍋町と隣



第１図　遺跡位置図（付表参照）

付表

周辺遺跡地名表（番号は第1図の番号に対応する）

番号	名称	所在地	種別	時代	発掘調査	備考
1	藤掛 遺跡	大字日置字藤掛	集落跡	縄文・古墳	昭56．9	
2	新山 〃	大字日置字新山	散布地	縄文		
3	小漆 〃	大字日置字小漆	〃	縄文		
4	上園 〃	大字日置字上園・古園	〃	古墳		
5	木戸 〃	大字日置字木戸	〃	先土器・弥生 古墳		
6	通山 〃	大字三納代字通山	〃	弥生・古墳		
7	赤松 〃	大字日置字赤松	〃	弥生		
8	原口 〃	大字日置字原口・西小牟田	〃	縄文		
9	東小牟田 〃	大字日置字東小牟田	集落跡	弥生		遺構あり
10	小牟田 〃	大字日置字小牟田	散布地	古墳		
11	常林寺跡	大字日置字常林寺	寺跡	中世～近世		古石塔あり
12	中伏 遺跡	大字日置字中伏	散布地	弥生		
13	今別府A 〃	大字日置字今別府	〃	古墳～中世		
14	今別府B 〃	大字日置字今別府 大字三納代字新町	〃	弥生		
15	鐙 〃	大字三納代字鐙	集落跡・古墳	弥生・古墳	昭56．2	
16	富田村古墳	大字日置字隅ケ迫 ほか	古墳・横穴墓	古墳		昭19.12.25 県指定
17	（追分）	大字新田字鶴ケ牟田		先土器		ナイフ形石器 1 石核 1
		高鍋町				
18	下永谷古墳群	大字南高鍋字日置牧	古墳（円）	古墳		
19	永谷横穴墓群	大字南高鍋12,377	横穴墓	古墳	昭57．3（2基）	
20	上永谷古墳群	大字南高鍋字前古場 上永谷	古墳（円）	古墳		昭12．7．2 県指定
21	雲雀山古墳	大字南高鍋字高岡11,624	古墳（円）	古墳		南九州大学構内
22	水谷原古墳群	大字南高鍋字水谷原 ほか	古墳 （前方後円・円）	古墳	昭49．3（1基）	
23	毛作古墳群	大字南高鍋字四ツ塚	古墳（円）	古墳		昭12．7．2 県指定

※ 新富町分については「新富町の埋蔵文化財」の地名表をもとに一部加筆した。

※ 高鍋町の県指定古墳は一括して高鍋町古墳として指定してある。

接しているが、高鍋町側の分布調査が十分でないため、第１図・同付表では新富町の分布が濃密になっている。

先土器（旧石器）時代については、追分から大野寅夫氏がナイフ形石器、石核を採集され、同台地の遺跡存在を裏付けたとして注目された。(注３)

縄文・弥生時代は現在のところ散布地の確認程度の状況である。

古墳時代になると、発掘調査例が３例ある。鐙遺跡（新富町）(注４)、永谷横穴墓群（高鍋町）(注５)地理的に隔たりがあり同台地の北縁にあたるが水谷原古墳（高鍋町）(注６)である。

鐙遺跡は昭和56年２月の調査で、弥生時代の溝状遺構、住居跡、遺物として扁平片刃石斧、蓋形土器、甕形土器などが出土し、円墳１基から蛇行剣などが出土している。

永谷横穴墓群は造成工事中に崖の法面から２基発見されたもので、金環、銅環、刀子、須恵器、土師器等が出土したが、横穴墓の性格上周辺にも相当の未発見のものが予側される。昭和57年３月、高鍋町教育委員会によって調査された。

水谷原古墳は、昭和49年３月、道路改修の際に円墳１基が調査されたが、保存状況も悪く、盗掘も考えられ、埋葬施設など確認できず、遺物として須恵器と土師器が出土している。須恵器の編年観から６世紀後半に比定される。

注１　遠藤　尚「新富町の地質と地形の概括」『新富町の埋蔵文化財　遺跡詳細分布調査報告書』　1982　新富町教育委員会

注２　同上報告書

注３　茂山　護・大野寅夫「児湯郡下の旧石器」宮崎考古第３号　1977　宮崎考古学会

注４　「鐙遺跡」新富町文化財調査報告書第２集　　1983　新富町教育委員会

注５　未報告

注６　「児湯郡高鍋町水谷原古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書　第18集　昭和51年３月　宮崎県教育委員会

３．発掘調査の経過と概要

発掘調査は昭和56年８月27日から実施した。

藤掛遺跡は洪積台地が舌状に南へ延びる基部に位置しているが、遺構の確認された所から南の畑地部分は工事計画地に入っており、既にかなり深くまで掘削されていた。そのため、遺構の存否について検証する術はなく、周辺における遺物の採集のみに留まった。しかし、

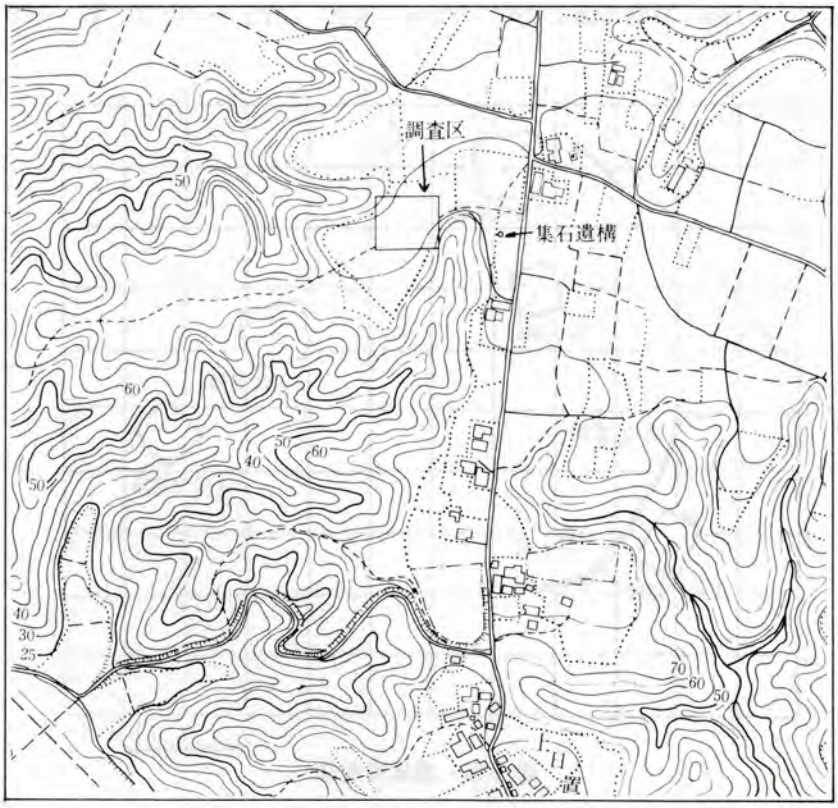
畑と山林の境界の法面では土器を包含した状態の住居跡らしい落ち込みを確認することができ、更に南まで含めた広範な地域を遺跡として認定しても良いと考えられる。

調査は磁北方向を基線として東西南北に5mグリッドを組み、東西線の西からA、B、C……、南北線の北から1、2、3……とした。

調査に入る段階では、住居跡4軒と溝状遺構を確認していた。住居跡は南から1号、2号……と呼称することにした。

藤掛遺跡の基本的な層序は、Ⅰ・表土（約25cm）、Ⅱ・アカホヤ層（約10cm）、Ⅲ・ブロック状の黒褐色土層（約20cm）、Ⅳ・粘質褐色土層となっている。第Ⅱ層のアカホヤ層が露出するまで削平されていたため、遺構は明瞭に確認することができた。

4軒の住居跡はいずれも基本的に4本の主柱をもった方形プランの竪穴式住居であり、中央付近に炉跡を有するものであった。遺物は量的に極めて少なく、土師器、須恵器がほとんどを占め、石器は皆無であった。なかでも炉跡に残っていた土師器の出土状況は炉の変遷上からも注目される。



第2図　遺跡周辺地形図

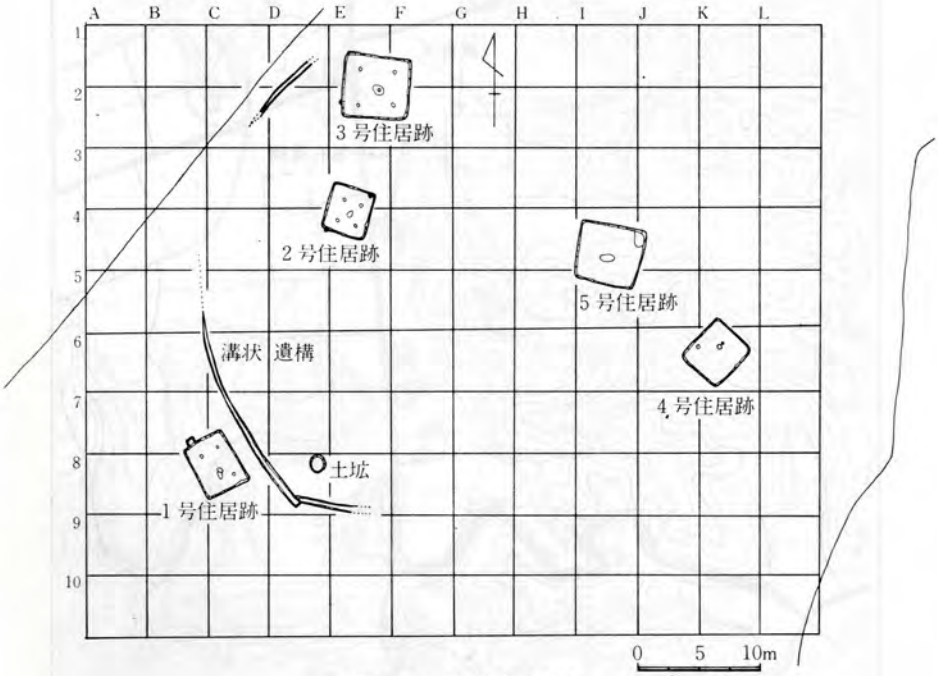
調査は９月17日までの予定であったが、その後、工事中に５号住居跡が発見され、９月20日に終了した。同地は現在畑として使用されている。

第Ⅱ章　古墳時代の遺構と遺物

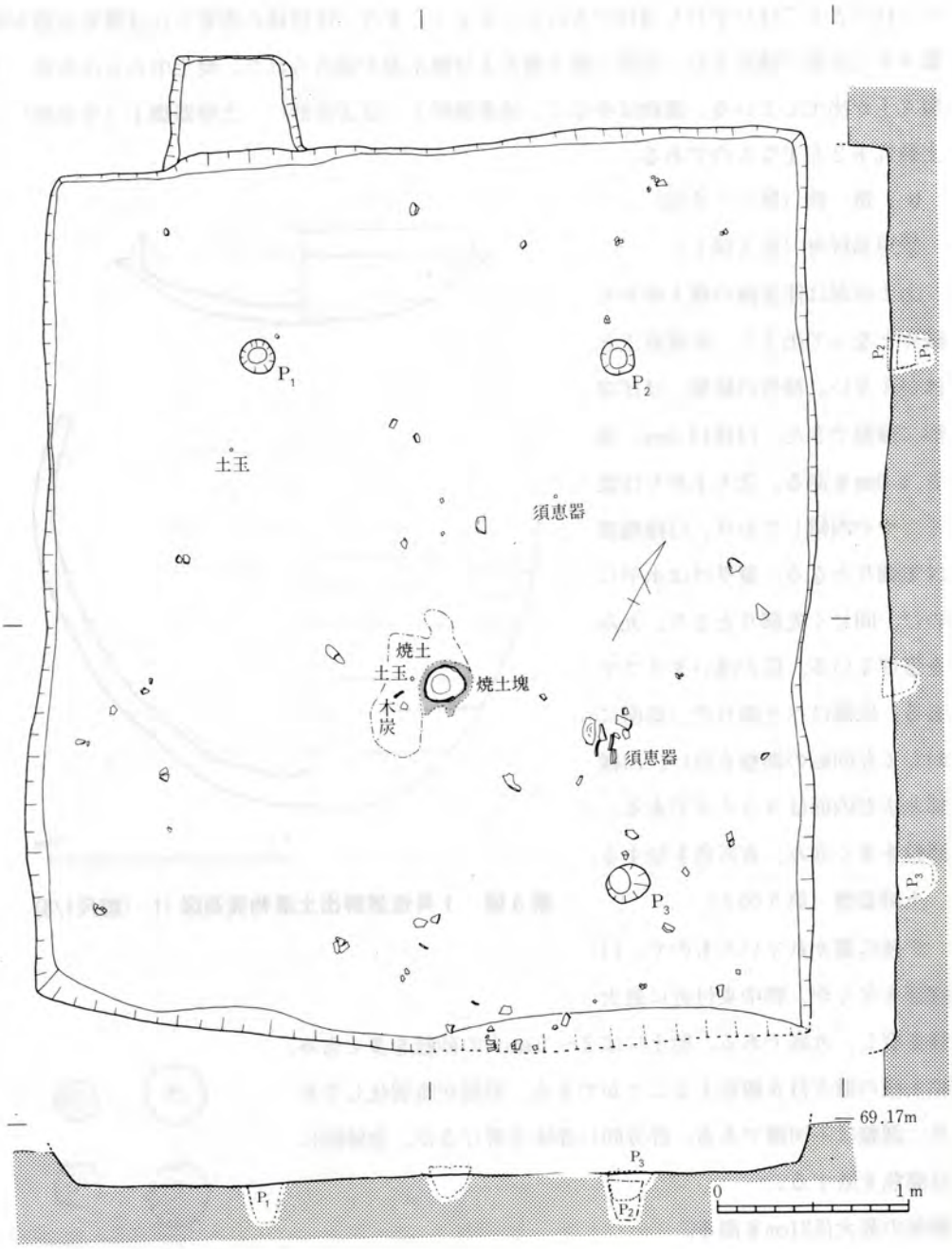
１．１号住居跡

ａ．遺　構（第４図）

１号住居跡は今回調査の住居跡の中では西端に位置し、円形状に巡る溝状遺構のいわば外郭にあたるものである。南北４ｍ60cm、東西３ｍ90cmの床面規模を有した長方形竪穴住居跡である。壁高は良く残っている所で、20cm程度であり、床面はほぼ平担をなしている。東南隅は開墾または耕作によるとみられる新しい時期の溝によって切られており、壁面状況は明らかではない。なお、北西隅に近く方形状掘り込みがみられたが、住居跡にともなうものかどうか定かでない。柱穴は住居プランの対角線上に３個所検出されたが、それぞれの規模を記すと、P_1 ＝18cm（住居床面での径）×20cm（深さ）、P_2 ＝18×20、P_3 ＝20×15であ



第３図　遺構分布図



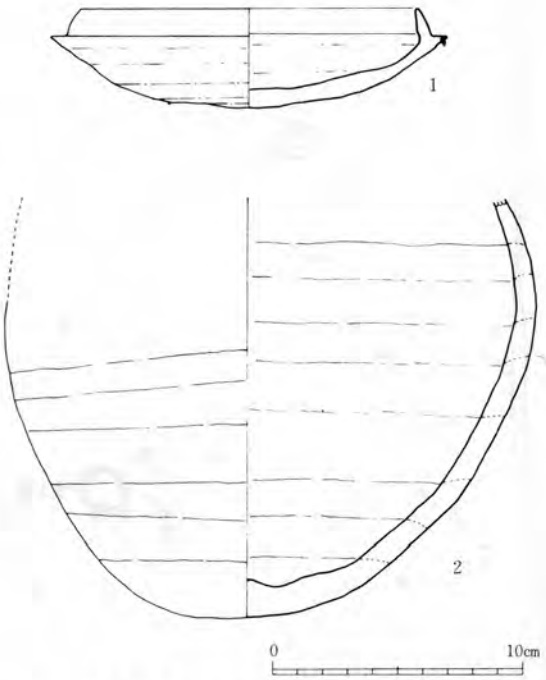
第4図　1号住居跡実測図

り、柱穴としてはいずれも浅目のものといえよう。また、住居跡の南寄りには甕形土器が埋置された状態で検出され、周囲に焼土塊および焼土面が認められた。焼土中からは木炭、土製丸玉が出土している。遺物は少なく、須恵器杯1（ほぼ完形）、土師器甕1（半完形）、土製丸玉2が主なものである。

b．遺　物（第5・6図）

須恵器杯身（第5図1）

出土状況は住居跡の埋土中から破片となって出土し、床面直上とはいえない。接合の結果、ほぼ完形に復原できた。口径13.5cm、高さ 4.0cmを測る。立ち上がりは低く、やや内傾しており、口縁端部は先細りとなる。蓋受けは水平にのび、同じく先細りとなり、丸みを帯びている。底の浅いタイプである。底部はヘラ削りで、器面に対して左回転の調整を行い、口縁部および内面はヨコナデである。砂粒を多く含み、青灰色を呈する。



第5図　1号住居跡出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）

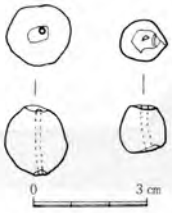
土師器甕（第5図2）

炉跡に置かれていたもので、口縁部を欠くが、胴中央付近に最大径を有し、丸底である。胎土には2～5mm大の砂粒を多く含み、粘土紐の継ぎ目を観察することができる。器壁が脆弱化しており、調整は不明瞭である。部分的に赤味を帯びるが、全体的には褐色を呈する。

胴部の最大径21cmを測る。

土製丸玉（第6図）

2個出土しているが、いずれも床面直上ではない。大小あり、大きい方は 1.9× 1.7cm、小さい方は 1.3× 1.2cmで、長軸方



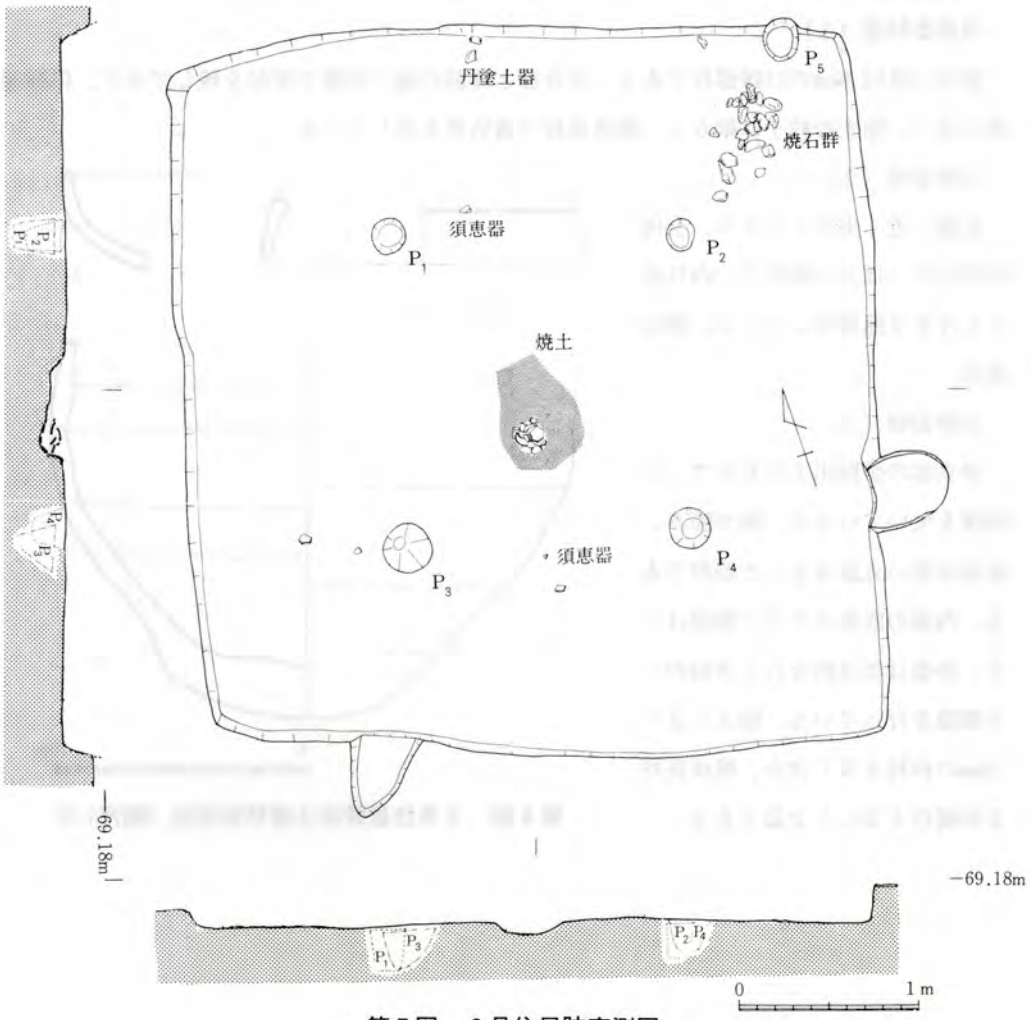
第6図　1号住居跡出土遺物実測図（2）（縮尺1/2）

向に1mm程度の貫孔がある。

2．2号住居跡

a．遺　構（第7図）

2号住居跡は規模が最も小さく、南北3m90cm、東西3m70cmの床面規模を有したほぼ正方形の竪穴住居跡である。壁高は高い所で20cmを残している。床面はほぼ平坦である。プランの西および南側に楕円形状の浅い掘り込みがあるが、住居跡との関係は不明瞭である。柱穴は住居プランの対角線上に4個所検出され、1辺1m60cmの正方形に結ばれる。柱穴の規



第7図　2号住居跡実測図

模は、P_1 ＝20cm（住居床面での径）×24cm（深さ）、P_2 ＝17×20、P_3 ＝28×20、P_4 ＝23×19であり、P_3 を除いてほぼ形状を同じくしている。その他、北東隅に近く、壁面に接して１箇所柱穴があり、その規模はP_5 ＝20×25である。

住居跡の中央には焼土で埋れた窪みがみられ、土師器甕形土器が１個体分破砕して出土している。

遺物は１号住居跡同様に少なく、土師器甕１、須恵器口縁部片２、丹塗土器片１ほか若干の土師器片を数える程度である。また、北東隅から焼石群が検出されたが、縄文時代早期にみられる集石に関するものであろうか。焼土等はみられず、平坦な状態での出土である。

ｂ．遺　物（第８図）

須恵器杯蓋（１）

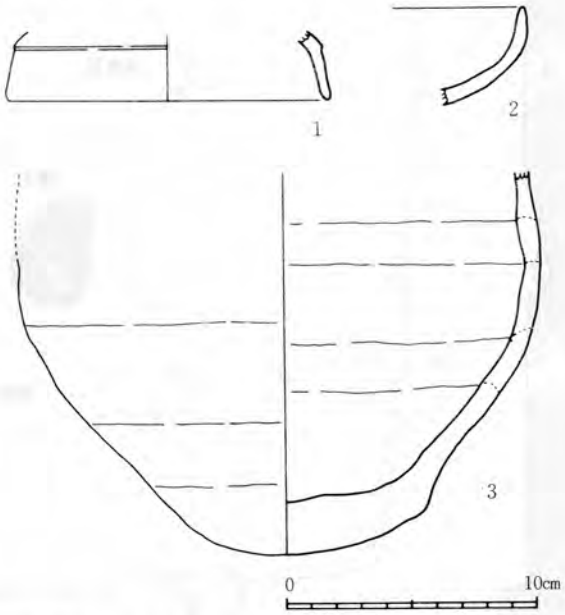
推定口径12.8cmの口縁部片である。天井部と体部の境に明瞭な突起を残しており、口縁端部は丸い。胎土の粒子は細かく、焼成良好で青灰色を呈している。

土師器椀（２）

北壁に近く出土しており、全体の四分の一ほどの破片で、内外面とも丹を全面塗布している。焼成良好。

土師器甕（３）

中央部の炉跡出土のもので、口縁部を欠いているが、胴が膨み、底部は厚い丸底をなした器形である。内面の底部はナデ、胴部はヘラ、外面は部分的なたて方向のヘラ調整を行っている。胎土に２～３mmの砂粒を多く含み、焼成良好な赤褐色を呈した土器である。

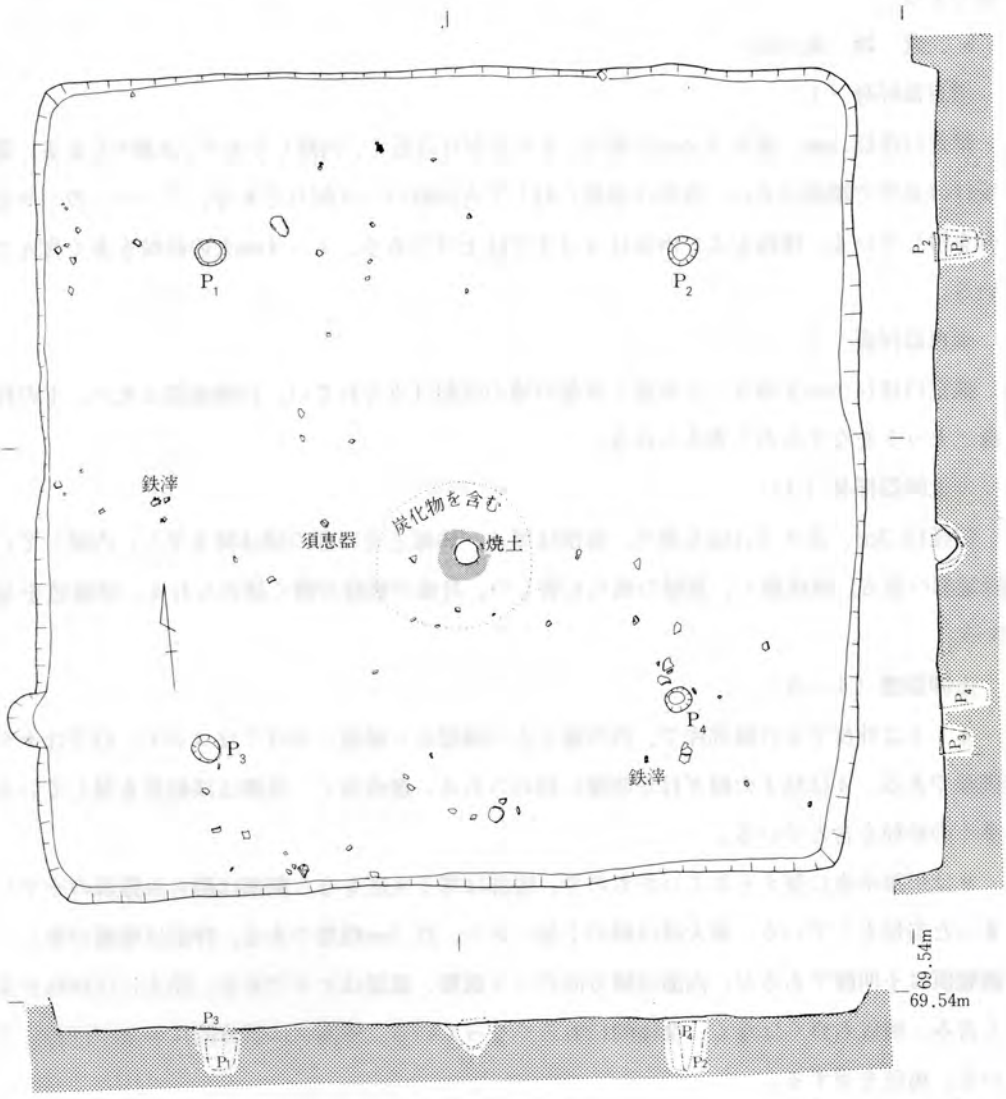


第８図　２号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）

3．3号住居跡

a．遺　構（第9図）

3号住居跡は南北5m30cm、東西5m30cmの正方形竪穴住居跡で、当遺跡では大型に属する。壁高は良く残っている所で33cmを測る。床面は平坦である。柱穴は住居プランの対角線上に4箇所検出され、柱穴間は3mから3m30cm程度で方形に結ばれる。



第9図　3号住居跡実測図

柱穴の規模は、P_1 ＝20cm（住居床面での径）×20cm（深さ）、P_2 ＝20×34、P_3 ＝20×20、P_4 ＝18×32でほぼ同規模であるが、P_2 、P_4 が深く安定したものである。プランの中央南寄りには土師器の甕形土器が埋置された状態で検出され、周囲に焼土、炭化物混入土が認められた。なお、西南壁に楕円状掘り込みがあるが、これは新しい時期の所産である。

遺物は少なく、土師器の甕１（半完形）、須恵器口縁部片、鉄滓および若干の土師器片程度である。

b．遺　物（第10図）

須恵器杯身（１）

推定口径12.5cm、高さ 3.4cmを測る。立ち上がりは低く、内傾しており、先細りとなる。蓋受けは水平で端部は丸い。底部は器面に対して左回転のヘラ削りである。「――」のヘラ記号を付している。体部および内面はヨコナデ仕上げである。１～４mm大の砂粒を多く含んでいる。

須恵器杯蓋（２）

推定口径14.0cmを測り、天井部と体部の境の突起はみられない。口縁端部は丸い。１の杯身とセットをなすものと考えられる。

土師器杯身（３）

口径13.3cm、高さ 5.1cmを測り、底部は厚く、体部と受け部の境は稜をなし、内傾して口縁端部へ至る。焼成悪く、器壁の風化も著しい。丹塗の痕跡が薄く認められる。淡褐色を呈する。

土師器甕（４～６）

４・５は外反する口縁部片で、内外面とも口縁部から頸部にかけてヨコナデ、以下はナデ調整である。４は粘土の継ぎ目が明瞭に認められる。焼成良く、色調は淡褐色を呈している。多くの砂粒を含んでいる。

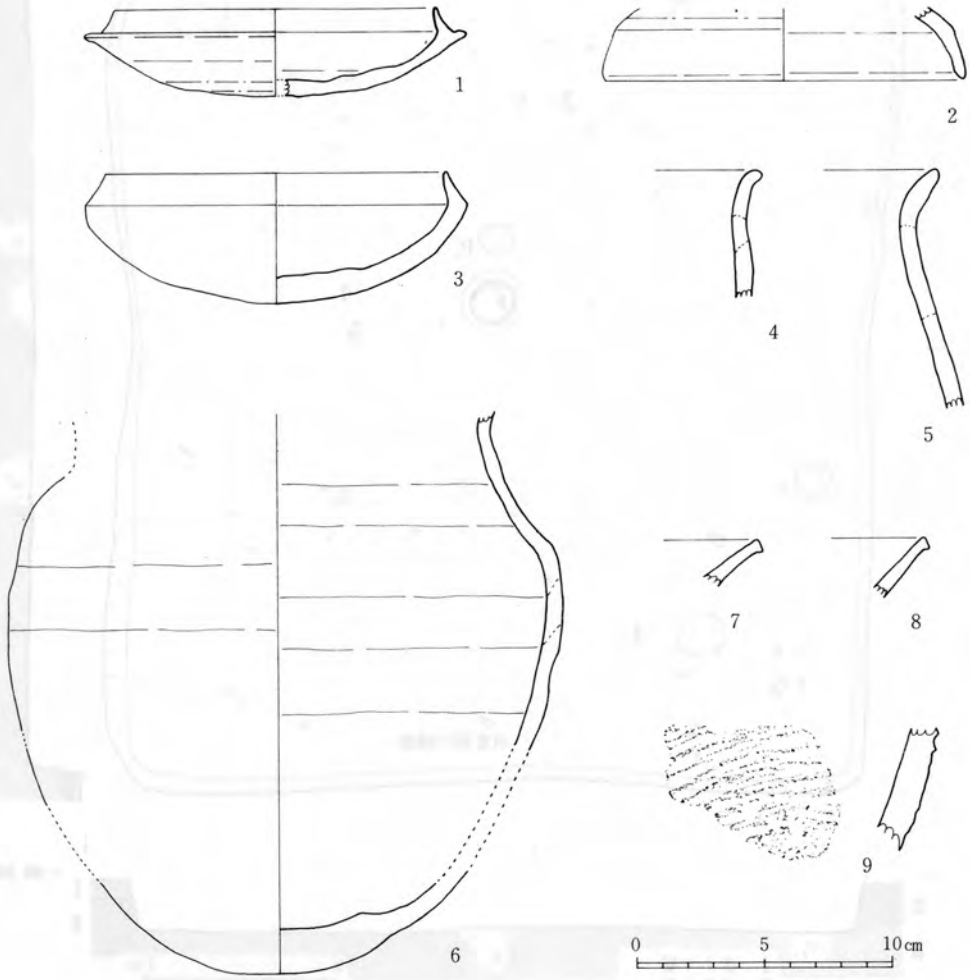
６は炉跡中央に据えられていたもので、底部は厚く丸底をなし胴部は膨らみ頸部のややしまった器形をしている。最大径は胴の上部にあり、21.5cm程度である。外面は摩滅が著しく調整痕は不明瞭であるが、内面は横方向のヘラ調整、底部はナデである。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良くはなく、全体的にもろくなっている。外面には部分的にススが付着している。褐色を呈する。

土師器高杯（７・８）

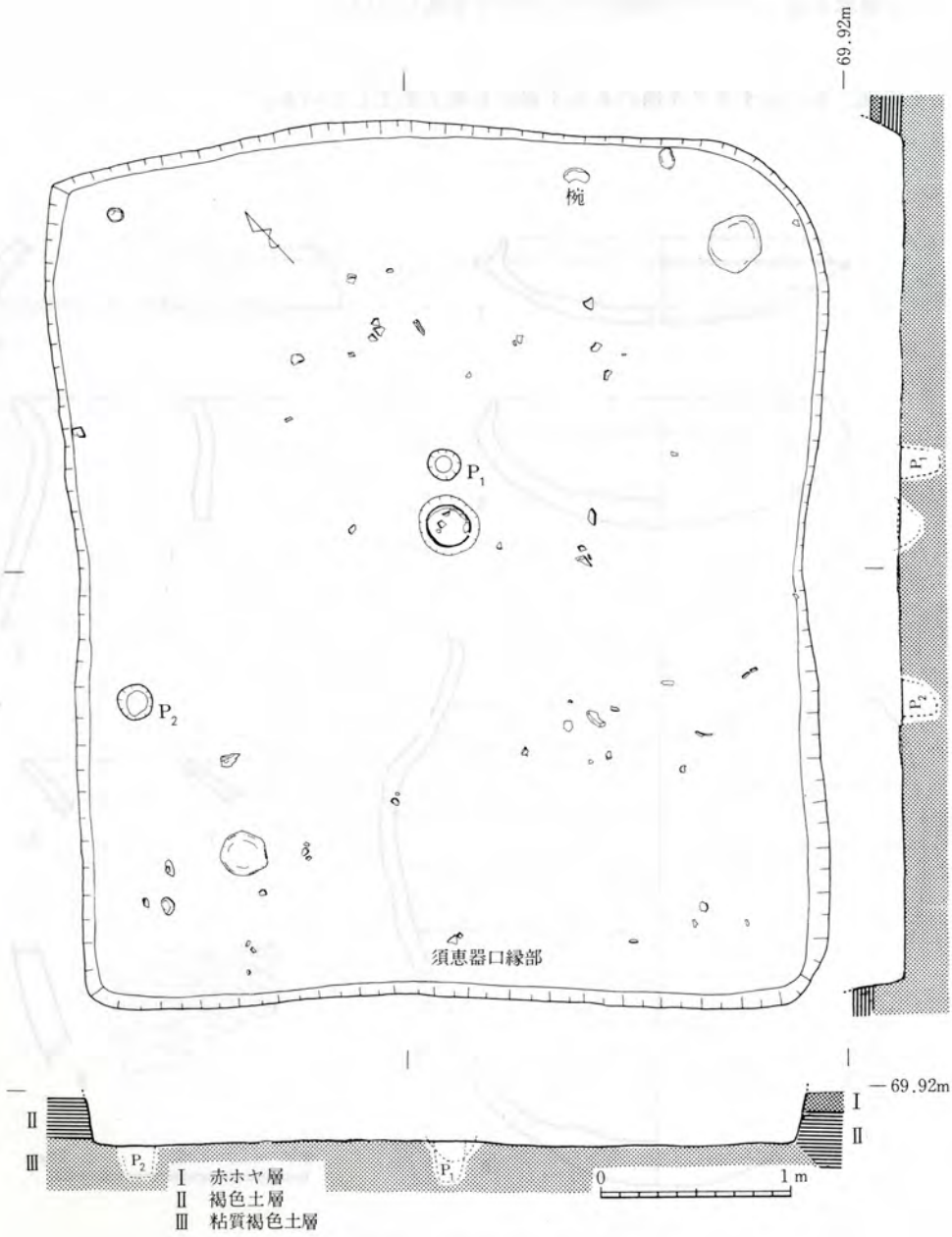
小型高杯の口縁部とみられる。器厚は薄く、口唇部は平坦で端部の上下が張り出している。

7は焼成が良く、ハケメ調整ののちみがきを施している。

その他、9に示すタタキ痕のある土器片も若干出土している。



第10図　3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



第11図　4号住居跡実測図

4．4号住居跡

a．遺　構（第11図）

4号住居跡は南北4m40cm、東西3m70cmの床面規模を有した隅丸長方形の竪穴住居跡であるが、東隅は円形状を呈しており、不整形である。柱穴は2ケ所検出されたが、プランの対角線上に規格的に配置されていない点で1．2．3号住居跡と異なる。

ピットの規模は、P_1 ＝17cm（住居床面での径）×21cm（深さ）、P_2 ＝18×17である。住居跡の中央には土師器甕形土器が埋置され、周囲には焼土がみられた。また、西および東隅の床面直上には径25～30cmの川原石が出土している。

遺物は少なく、土師器の甕1、椀1（ほぼ完形）、須恵器口縁部片ほか若干の土師器片である。

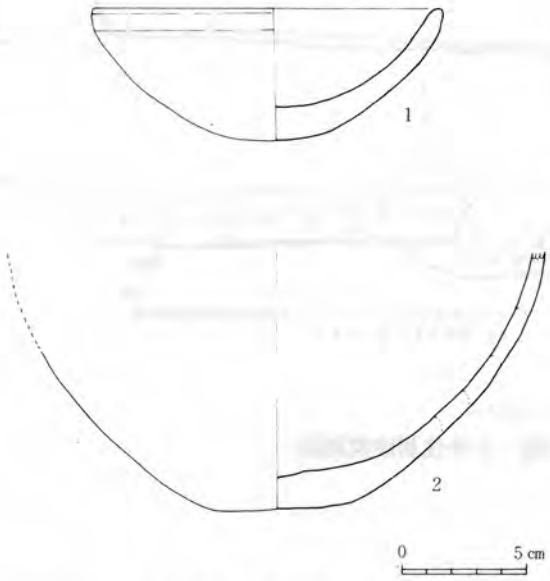
b．遺　物（第12図）

土師器椀（1）

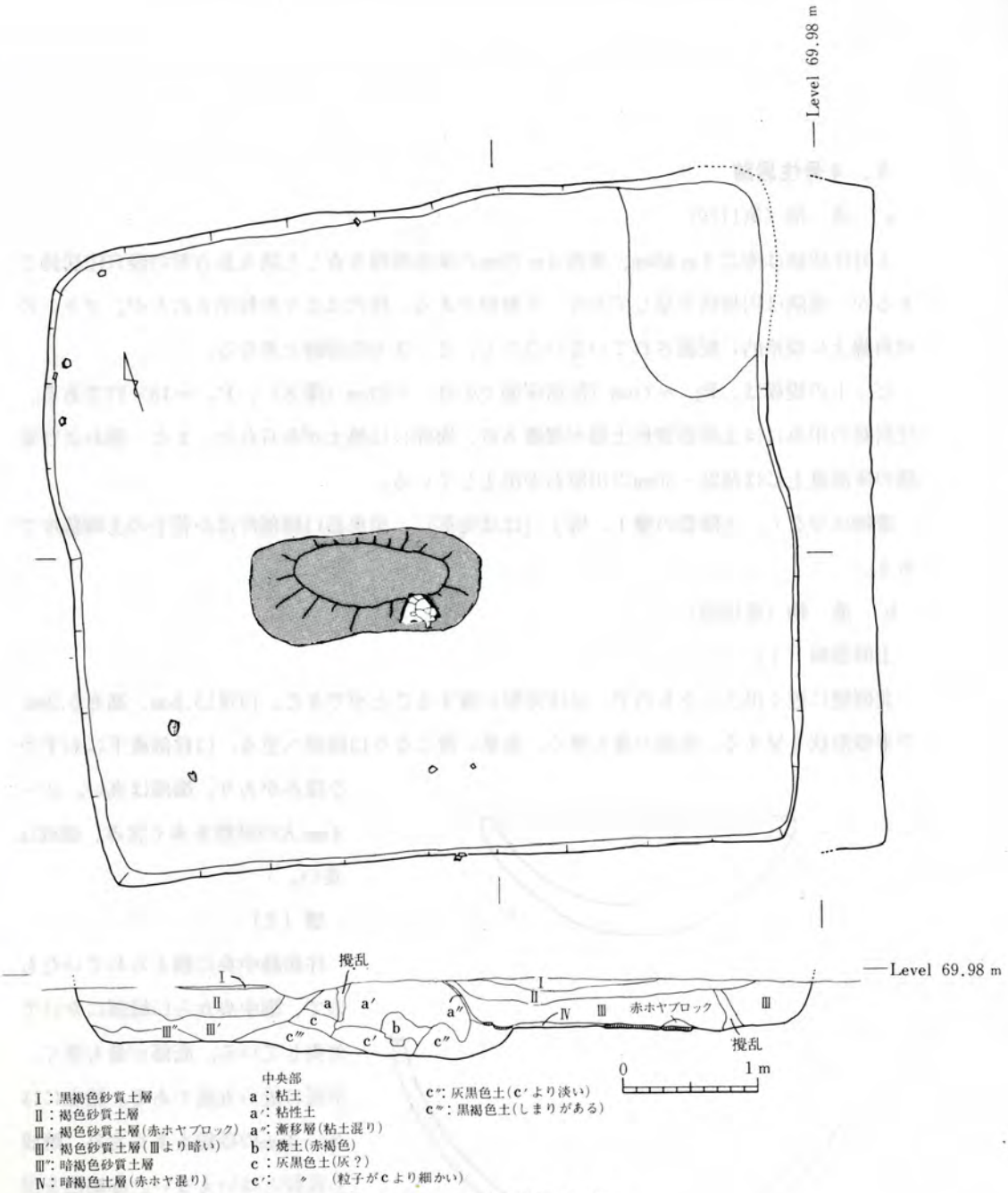
北側壁に近く出土したもので、ほぼ完形に復することができた。口径13.8cm、高さ5.2cm．で半球形状を呈する。底部が最も厚く、次第に薄くなり口縁部へ至る。口唇部直下にわずかな窪みがあり、端部は丸い。2～4mm大の砂粒を多く含み、焼成は良い。

甕（2）

住居跡中央に据えられていたもので、胴中央から口縁部にかけて欠失している。底部が最も厚く、平底に近い丸底である。胎土には2～3mmの砂粒を多く含み、焼成も良好とはいえない。赤褐色を呈し、全体的に脆くなっている。



第12図　4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



第13図　5号住居跡実測図

5．5号住居跡

a．遺　構（第13図）

5号住居跡は南北4m82cm、東西5m36cmを測る東西に稍長い隅丸の長方形である。壁高は良く残っている所で35cmを測る。中央部に粘質土を中心とした盛り上った部分があり、土層断面に見えるように、その中に焼土（赤褐色）や若干の炭化物を伴なう灰黒色の灰と思わ

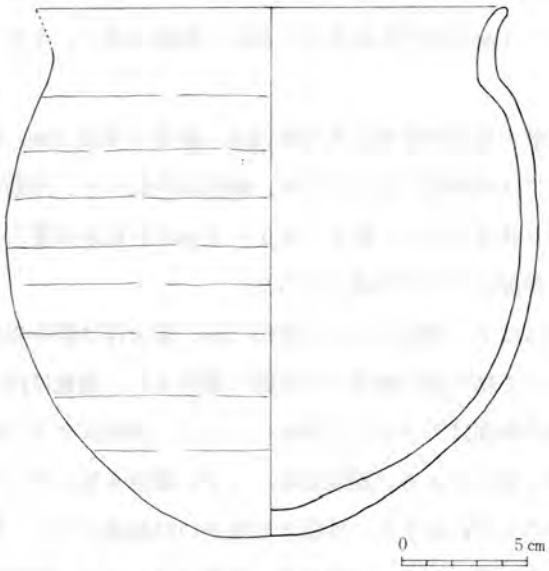
れる層がある。また土師器甕の底部が粘質土の部分からずれ落ちた状態で出土していることから、カマドに類似する遺構とも考えられる。北東隅には稍しまった床面が緩やかに南に傾斜する部分がある。その他の床面については、土層断面にみられるような黒色土に赤ホヤ混りの非常に硬い層の貼床が所々にみられる。ピットについては、検出出来なかった。

遺物は、上記の甕の他に、土師小片を少し、礫を数点出土しただけである。

b．遺　物（第14図）

土師器甕

1はやや胴が張り、最大径が中央より上位にあり21.0cm、推定口径18.8cm、器高21.1cmの丸底の甕である。口縁部は僅かに外反し、内外面ともヨコナデ調整され、体部外面は、1～2cm巾のやや明瞭な積み上げ痕を残し、やや粗いナデがみられる。底部外面には煤の付着がみられ、ナデによる調整がなされている。内面はほとんど積み上げ痕が不明な位ナデが行なわれている。胎土には2～5mmの石粒を多く含み、焼成は硬く本遺跡出土の中では良好な部類で、色調は淡褐色を呈するが頸部付近に赤味がかった部分もある。



第14図　5号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）

6．溝状遺構

a．遺　構（第15図）

重機による削平のため、遺構の全容は明らかではないが、残存している部分の状況を記述すると、全体的には円形状に連なるが、D－8区の南西で切り合いがみられ、2本の溝状遺構が存在することになる。遺構の位置関係をみると、1号住居跡を円の外に隣接して2・3号住居跡を内側にとり囲むように巡っている。最も良く残っている所で、溝幅75cm、深さ30cmを測り、断面は半球形状である。遺物はB・C－6区に集中して出土し、ほとんどが甕形土器であったが、須恵器杯身片、縄文土器片も各1点出土している。

b．遺　物（第16・17図）

溝状遺構内から出土した土器群である。

土師器甕（1～4）

1は張りの少ない胴中央部に最大径をもち、ややしまった頸部に外反する口縁部がつく。推定口径17.0cm、最大径（胴中央）20.0cm、器高23.8cmを測る。底部は厚く丸底を呈するが、中央は窪んでいる。口縁部から頸部はヨコナデ、胴部はハケメ、底部はヘラ磨き状の調整で内面はナデ仕上げである。胎土には1～3mm程度の石粒を多く含み、焼成は良く、うすい褐色を呈する。

2は1より大型で、やや胴が張り、最大径は胴中央にあり25.5cm、推定口径22.2cm、器高25.5cmを測る。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデ、胴部は内面ナデ、外面ハケメ、底部は内面ナデ、外面荒いヘラ削り状を呈する。胎土には1～5mmの石粒を多量に含んでいる。焼成良く、褐色を呈し、胴上半部にススが付着している。

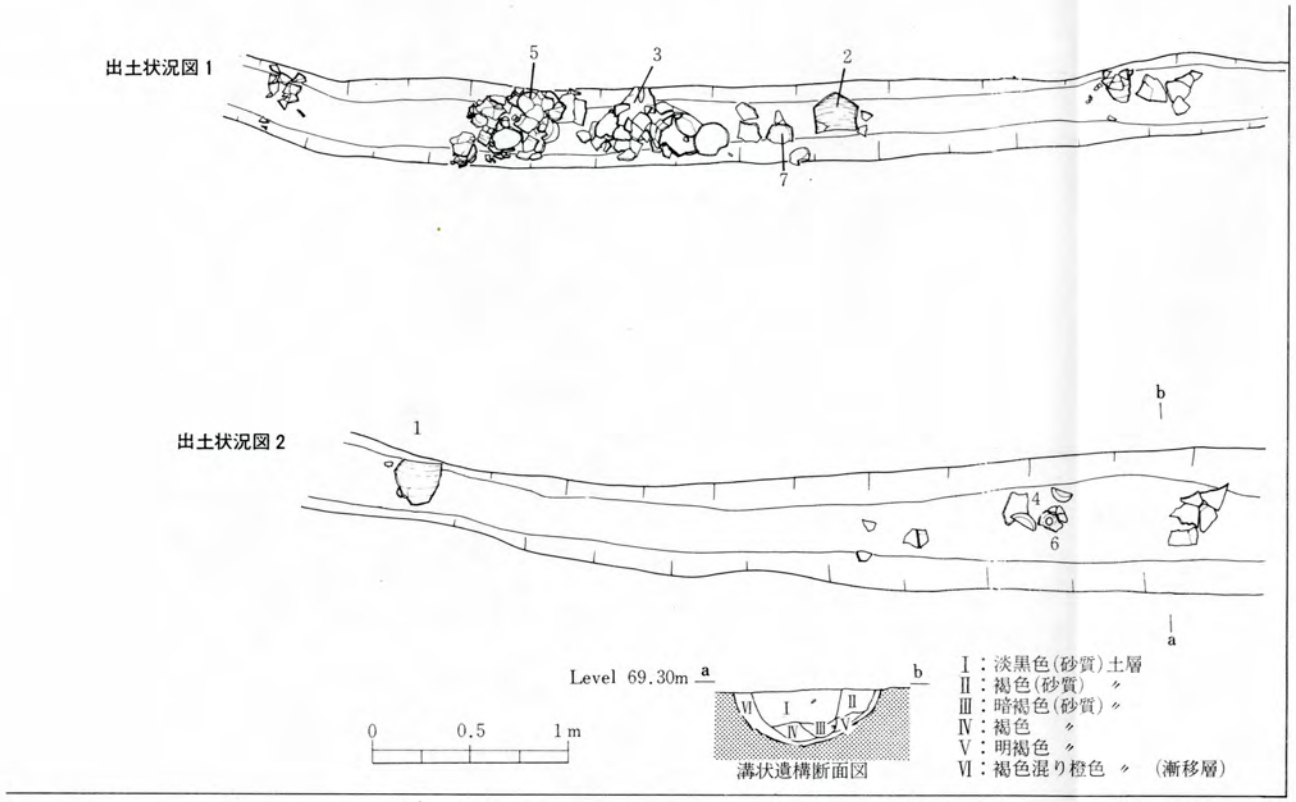
3は底部を欠失しているが、器形的には2に類似する。口径21.5cm、最大径は胴中央にあり23.7cmを測る。口縁部から頸部にかけて粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察され、調整は内・外面ともにヨコナデである。また、胴部の外面は下から上へ斜めにハケメ、内面はケズリ調整である。胎土には2～3mmの石粒を多く含んでいる。焼成良好、うすい褐色を呈している。

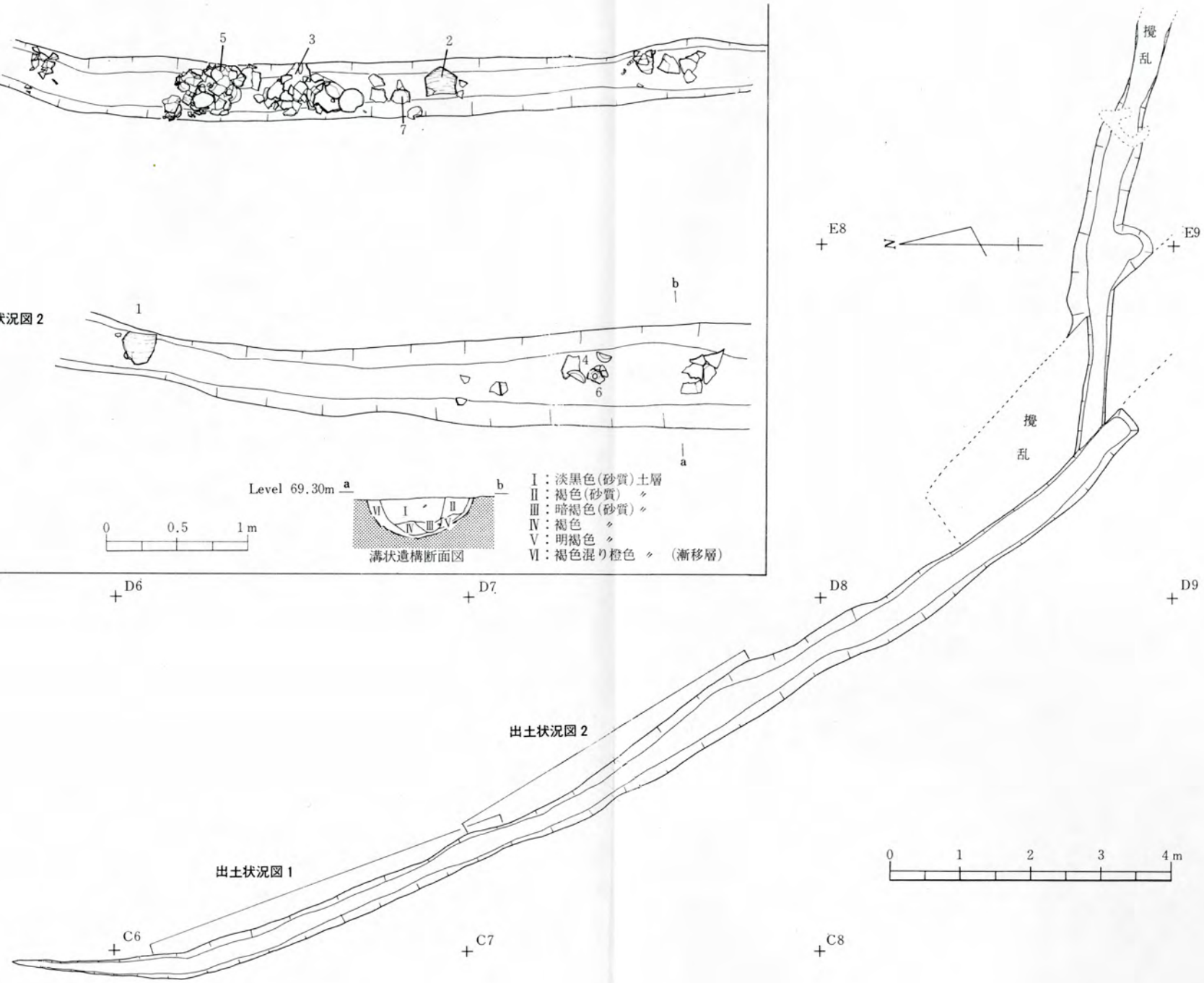
4は肩の張りがなく、わずかな頸部のくびれをもち、外反する短かい口縁部がつく。推定口径21.5cmを測り、最大径は胴部にあると思われる。口縁部内・外面はヨコナデ、胴部外面はケズリで、部分的にススの付着がみられる。内面はナデ仕上げである。焼成が悪いのか器面全体は摩耗が著しい。胎土は細かいが、石粒を多く含んでいる。うすい褐色を呈する。

土師器底部（5～9）

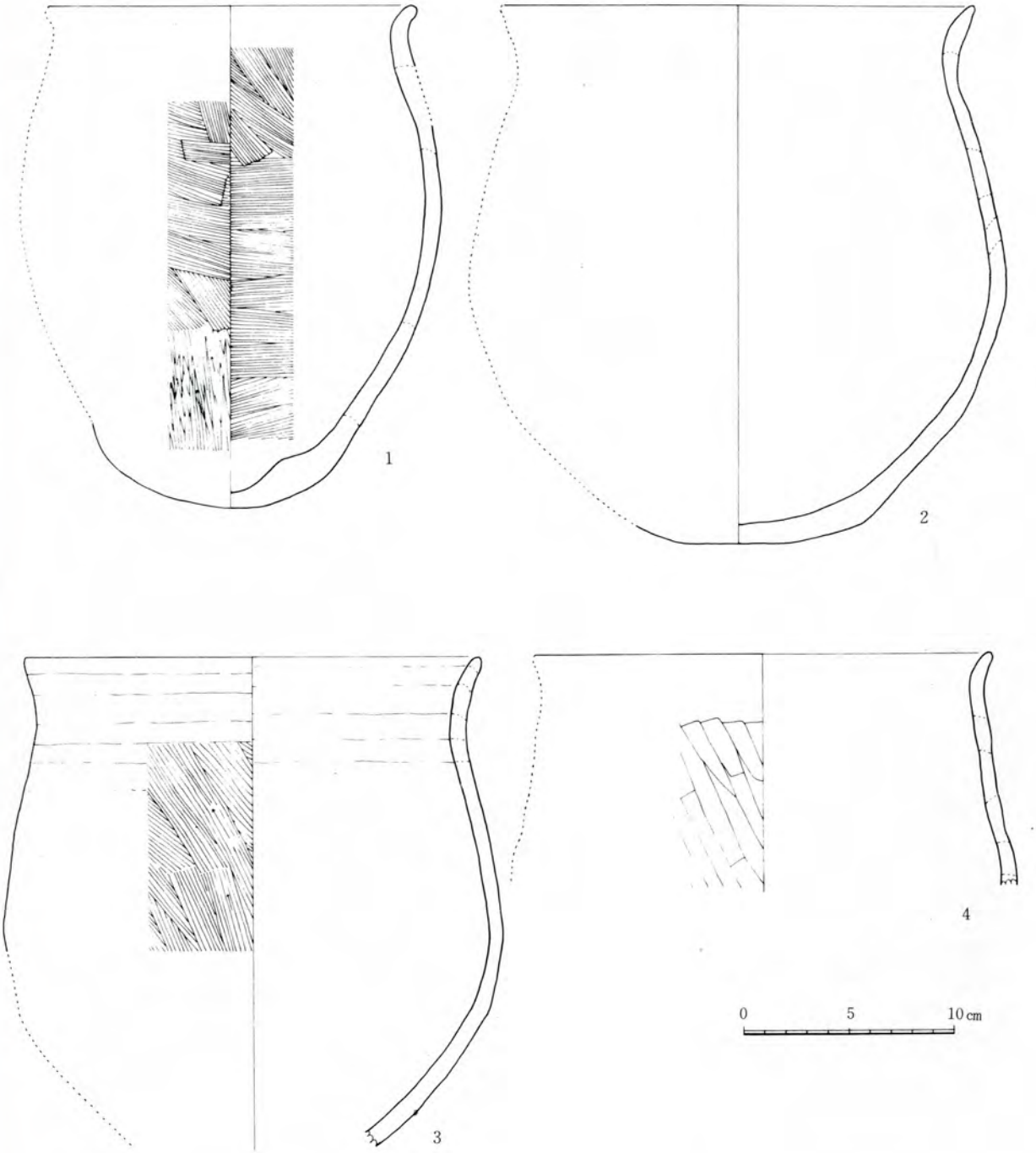
溝状遺構出土の底部を一括した。

5は丸底をなし、肥厚している。内面はハケメで黒色を呈し、外面はハケメと思われ、上部にはススの付着、底面には擦痕がみられる。胎土には4mm前後の大きめの石粒を多量に含んでいる。焼成良く、褐色を呈している。7も5と同様厚目の丸底である。内面はハケメ、外面はナデを施しているが、一部ヘラナデがみられる。胎土に3～4mm前後の石粒を多量に含み、焼成良く、内・外面とも褐色を呈している。6は甑の底部で、中央に3.5×4.0cmの円形状の穴をあけている。底部の成形は粘土紐を積み上げた後、別の粘土を厚く貼り付け、指又はヘラ状のものでナデ調整している。胎土には1～3mm程度の石粒を含んでいる。焼成良好で赤褐色に近い。8はこの遺跡では数少ない平底で、木の葉底であり、外への張り出し

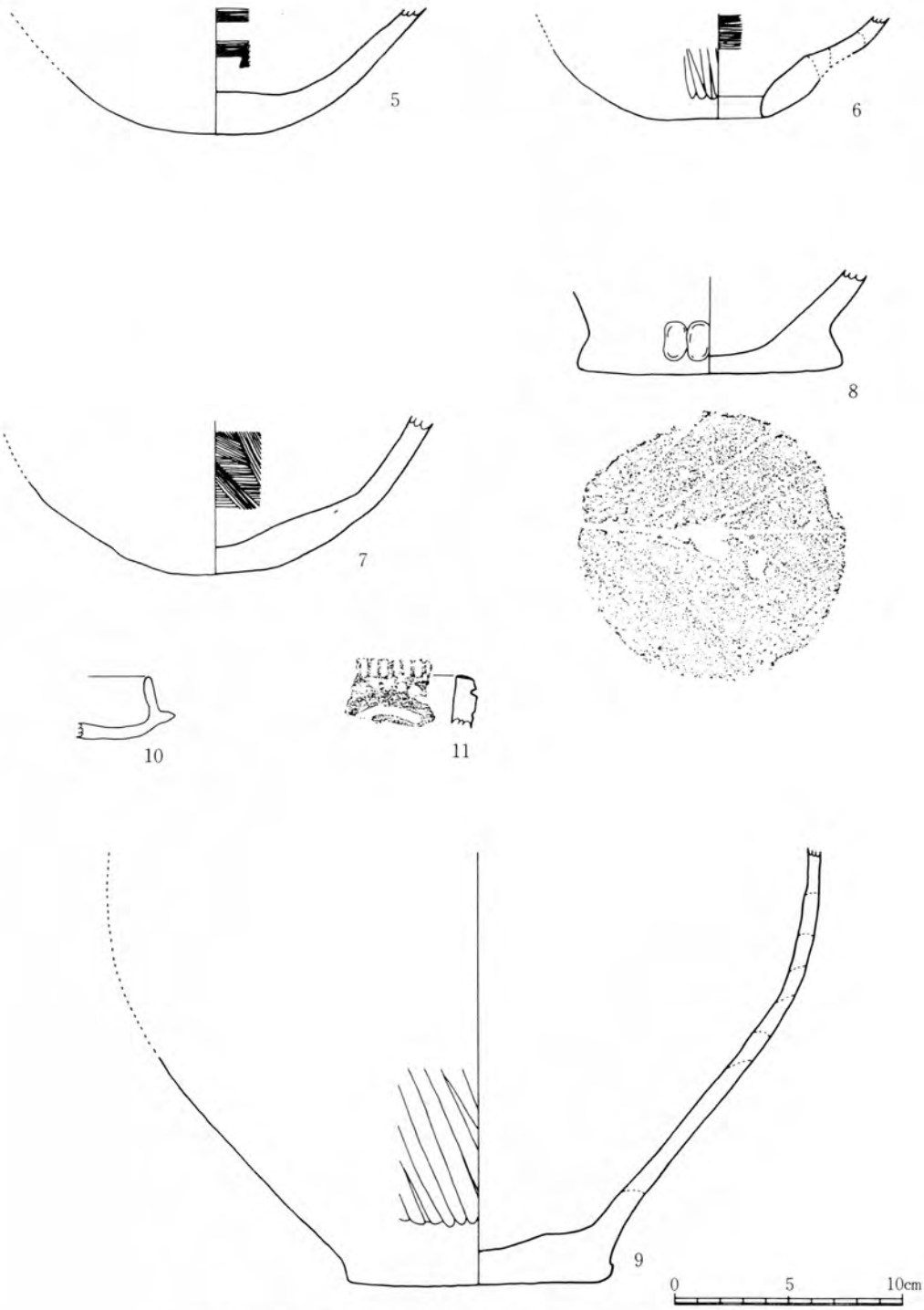




第15図　溝状遺構実測図



第16図　溝状遺構出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）



第17図　溝状遺構出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）

を有する。底径11.7cmを測る。胎土には１～４mmの石粒を多量に含んでいる。焼成はあまり良いとはいえず、赤褐色に近い。９は口縁部を欠いているが、平底の大型土器である。底部は厚く、わずかな外への張り出しがみられ、底径11.5cmを測る。内・外面とも器面の保存状況は悪いが、内面はナデ、外面はヘラ状のものによる斜方向の削り上げ、底面はナデとみられる。胎土には２～３mm大の石粒を多く含んでいる。焼成は良く、赤褐色に近い。

須恵器杯身（10）

破片のため、口径、器高ともに不明であるが、蓋受けは水平にのび、先端は尖り気味になる。立ち上がりはやや内傾しており、先端部は丸味を帯びている。底部はヘラ削りで、自然釉がかかっている。

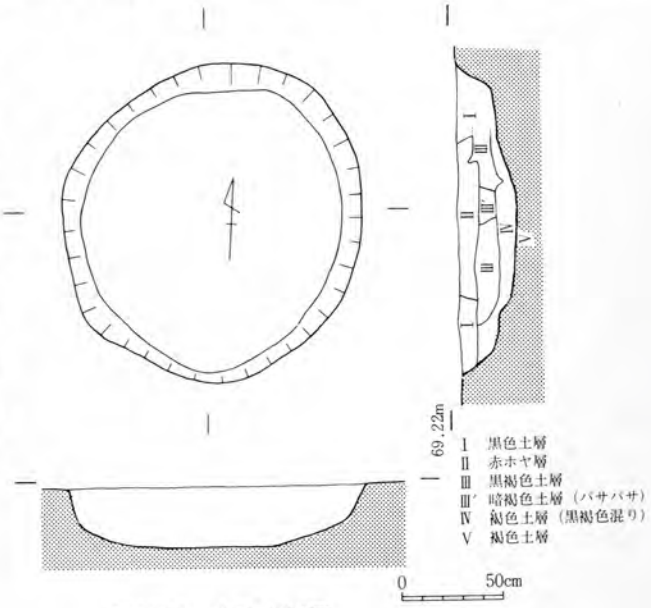
縄文土器（11）

１点のみの出土で、口唇部に平行な刻み目を施し、口縁部上端に円形刺突文を並べ、その下に先端の切れる沈線文を丸く施文している。赤褐色を呈し、焼成は良い。前期のものと思われる。

７．その他の遺構

土坑（第18図）

円形状に巡る溝状遺構を狭み、１号住居跡の東約７ｍの地点に検出された円形の土坑がある。遺構が発見された時の状況ではアカホヤ層の中にドーナツ状に黒色土層がみられ、輪を描いた様な落ち込みと考えられたが、断面観察により中央のアカホヤは埋土の一部の可能性が強まり、遺構形態は円形土坑になるに至った。南北約 160cm、東西約 150cm、中央部の深さ30cmの規模である。遺物は皆無であり、用途、時期ともに明らかにし得なかった。



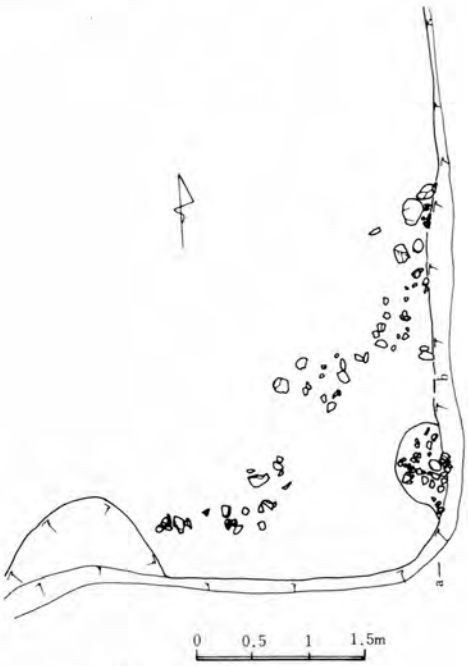
第18図　土坑実測図

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物

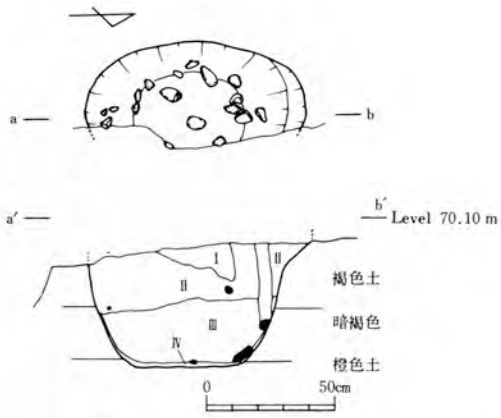
集石遺構

a．遺　構（第19、20図）

集石遺構は住居跡群の東方に小谷を隔てた谷頭地形の付け根部台地縁に立地する。発見されたものは１基であり、　西側半分を残した土 坑を中心にそれに連なると思われる焼礫群が約 1.5m の径で広がっていた。土坑はアカホヤ層下の黒褐色土層より掘り込まれ、長軸85cm、深さ50cmを測り、推定短軸は65cmを測ると思われ、楕円状の形状を呈するものと思われる。土坑上面に挙大の焼石があり、土層は基本的に３層に分けられ、最下層（Ⅲ層）下部に比較的まとまった配石をみる以外、焼石・炭化物が中層・上層にわずかながら散らばった状態で出土している。遺物は土坑上面位に白っぽい黒耀石のチップが数点出土しており、中層（Ⅱ層）上位に押型文（山形）土器片を伴出している。なお、壁面に焼成を受けたと思われる焼土はみられなかった。



第19図　集石遺構実測図（1）



第20図　集石遺構実測図（2）

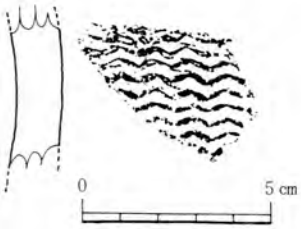
b．遺　物（押型文土器・第21図）

極めて鈍い角度の山形が押圧された押型文土器片である。胎土は良く精選されており、少量の長石を含み、焼成は極めて良好で色調は赤褐色を呈する。

本遺構はこれまで県内で確認された集石遺構の出土土層及び表面の焼礫の分布等に基本的に同様形態をとるが、梯遺跡(注)での面高哲郎氏の分類の中での土坑掘り込みの比較的深いとされるA類に較べて、土坑上面の径が小さく、土坑壁の立ち上がりが極めて急であり、深さについても比較的に深い。

出土遺物の押型文土器、チップ、炭化物等から基本的に石蒸しの機能が想起される。

注　宮崎県文化財調査報告書第24集所収「梯遺跡」　宮崎県教育委員会　1981



第21図　集石遺構出土遺物実測図（縮尺1/2）

第Ⅳ章　結　　語

今回の藤掛遺跡発掘調査では、縄文・古墳時代の２時代にかかわる遺構を確認できた。

まず、縄文時代の遺構は「集石遺構」である。しかし、工事中の発見で、遺構の周辺はかなり掘削が進んでおり、詳細な調査は不可能に近く、その全容を知ることはできない状況にあったが、アカホヤ層下の黒褐色土層中に焼礫が円形状に集積された遺構を１ケ所調査することができた。新富町内では現在まで４遺跡について集石遺構が確認されている。藤掛遺跡の他、西牧遺跡(注1)、中尾遺跡(注2)、新田原A遺跡(注3)である。いずれも谷に刻まれた洪積台地の縁辺部に位置している。

集石遺構は民俗例などから石蒸し（earth oven）的調理施設と考えられるが、早期では住居跡をはじめ、生活跡の調査例が少ないこともあって、機能を含めた詳細な検討は未だ不

十分な状況にある。しかし、なにはともあれ、藤掛遺跡の集石遺構には少量ではあるが、押型文（山形）土器が伴出しており、縄文時代早期遺構として、分布・構造論にかかわる新たな蓄積を行ったことになる。

古墳時代の遺構は5軒の住居跡、溝状遺構などであるが、出土した須恵器の編年観から6世紀後半頃に比定できる。住居跡はわずかな規模の大小はあるが、すべて方形プランをなし、基本的に4本主柱の建物と思われる。更に共通的に住居プランのほぼ中央に炉をもち、しかも甕形土器が埋置された状態で遺存している。これら構造上からも、時期的隔たりの少ないほぼ同時期に営まれたものと言うことができる。

県内では、この期の住居跡の調査例として、高鍋町上別府遺跡(注4)、宮崎市浄土江遺跡(注5)がある。

上別府遺跡では9軒の住居跡が調査されたが、その内3号住居跡だけが炉をもつものであった。遺跡としては6世紀後半に比定されており、藤掛遺跡とほぼ同時期になる。また、浄土江遺跡では、6軒の住居跡（201、202、206、208、210、305号）で同様な炉の構造がみられたが、2ケ所に併設される例があるなど、内容的に時期幅が考えられ、検討を要する。

以上の3遺跡の住居跡群によってある程度、日向の平野部における6世紀から8世紀にかけての住居形態変遷の実態が明らかになろうし、更に今後、古墳群との関連をはじめ、不明瞭な古墳時代の社会構造、文化内容解明に迫る糸口の一つとして、藤掛遺跡は重要な意味をもつものと言えよう。

注1．さきの遺跡詳細分布調査で確認された。新富町遺跡番号4017 「新富町の埋蔵文化財」 新富町教育委員会　1982

注2．新富町大字新田字中尾で、昭和52年9月、ブルドーザーによる畑地の整地作業中発見された。山形押型文の口縁部が出土している。

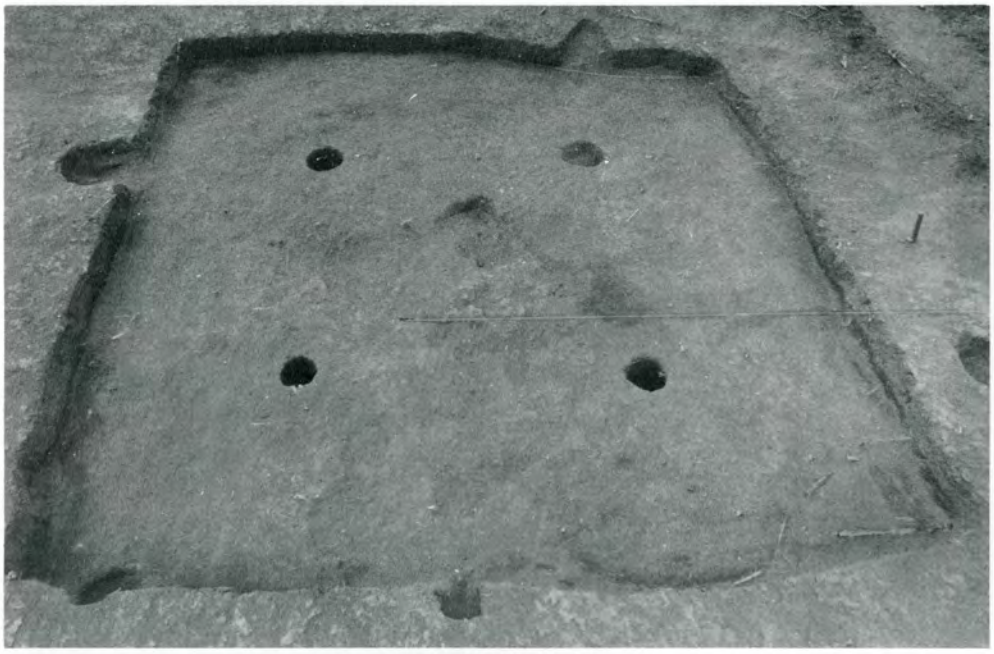
注3．昭和57年2月～3月に新富町教育委員会で発掘調査

注4．「上別府遺跡」『お染ケ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 宮崎県教育委員会　1979

注5．「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書第6集』 宮崎市教育委員会　1981

図版 1

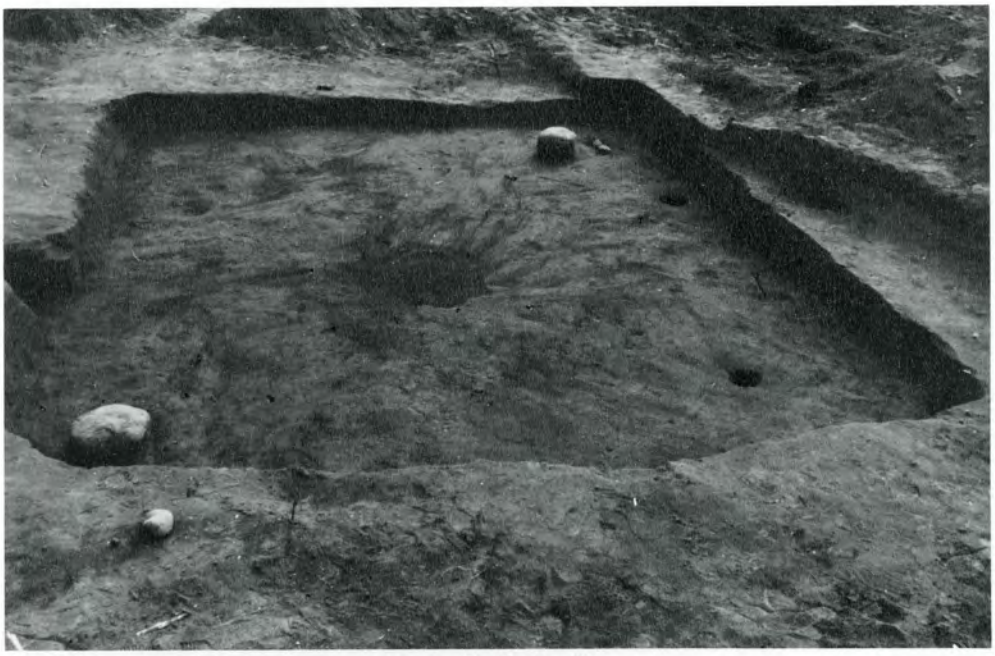
(1) 発 掘 風 景



(2) 2 号 住 居 跡

図版 2

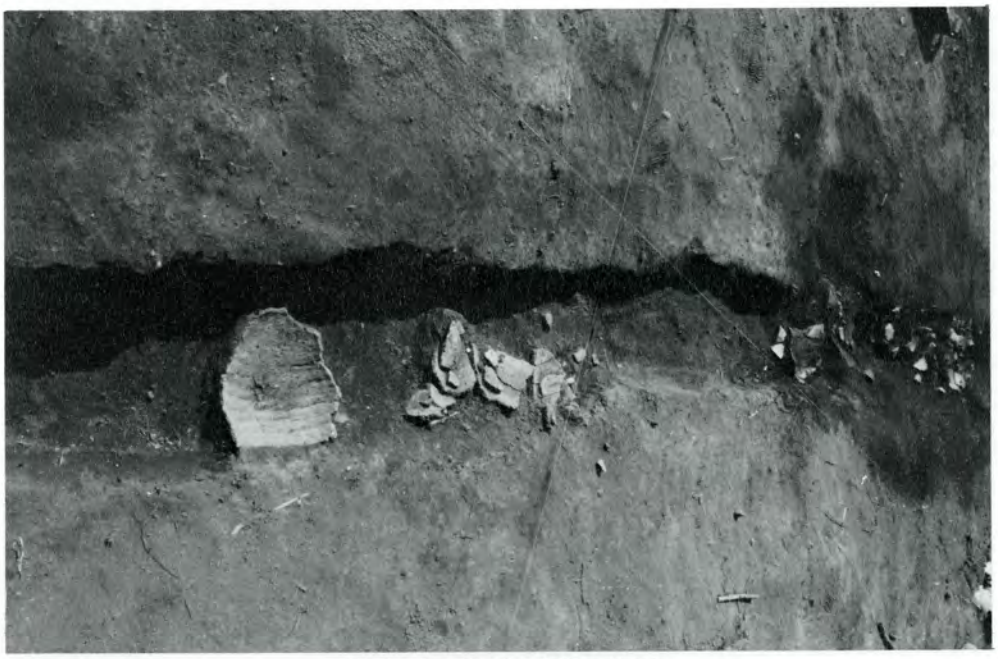
(1) 3号住居跡中央部



(2) 4 号 住 居 跡

図版 3

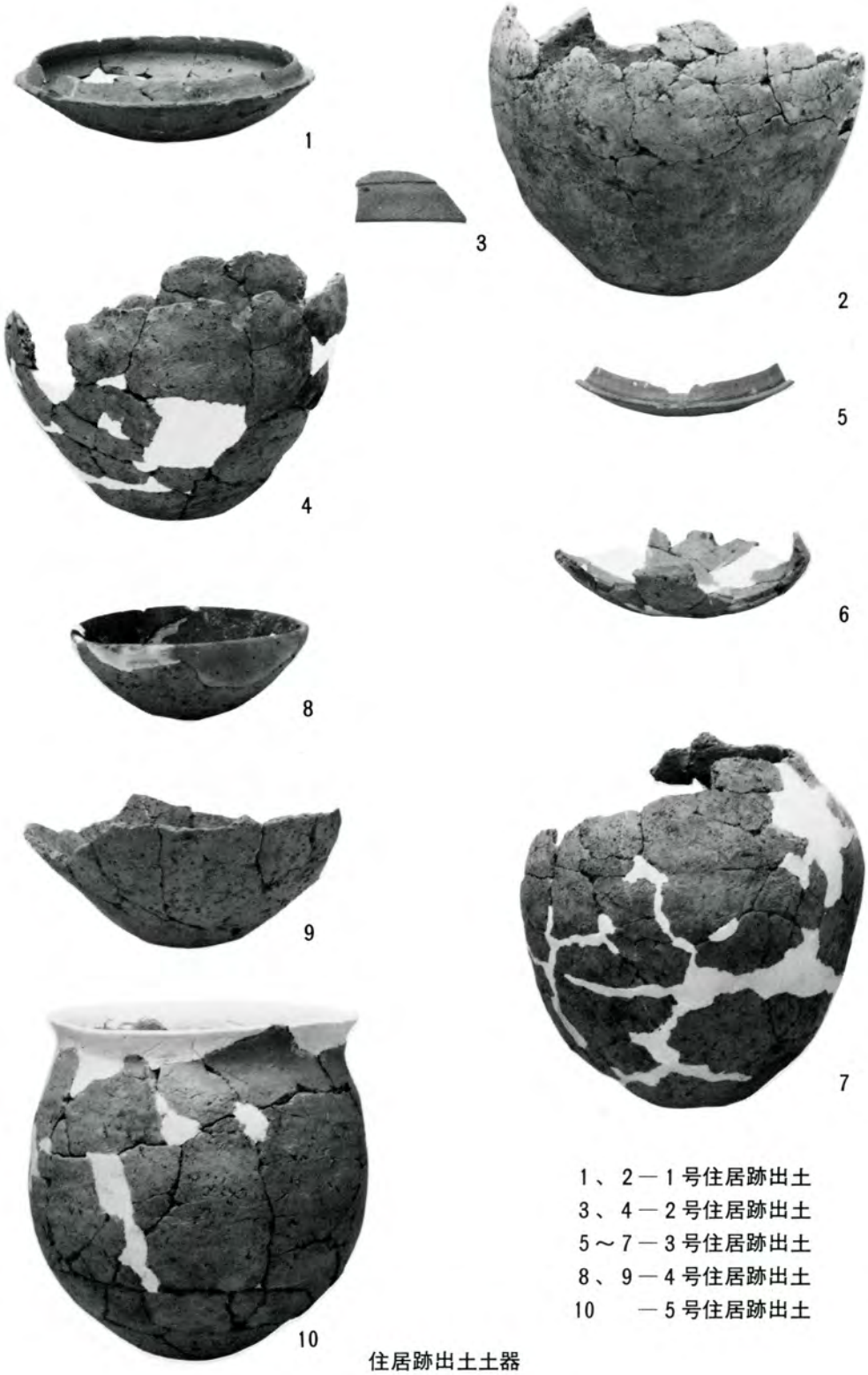
溝 状 遺 構（発掘前）



溝 状 遺 構（遺物出土状況）

図版 4

集 石 遺 構



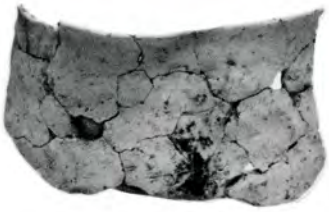
1、2－1号住居跡出土
3、4－2号住居跡出土
5～7－3号住居跡出土
8、9－4号住居跡出土
10　－5号住居跡出土

住居跡出土土器

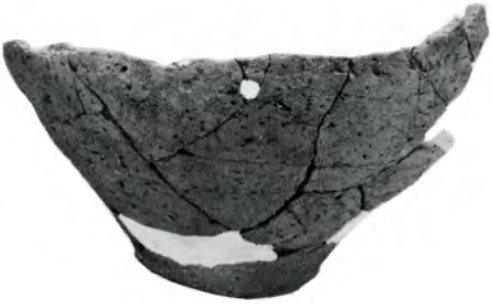
図版 6

1

2



3



4

5

甑　　木の葉底

溝状遺構出土土器

図版 7

遺跡見学会

新富町教育委員会は、昭和56年９月15日（敬老の日）現地において郷土史研究講座を兼ねて藤掛（ふじがかり）遺跡見学会を行い、案内等の不備にもかかわらず20数名の参加を得た。また同年11月、町教委主催の文化祭において藤掛・鐙（あぶみ）遺跡を中心に報告展示を行い、多数の参加を得た。

これらの見学会・展示会等の機会を活用し、今後とも町民の方々に文化財についての御理解と御協力を仰ぎたい。

（有田）

新富町文化財調査報告書第２集
鐙　遺　跡
藤掛遺跡

発行年月日　昭和５８年３月３１日
編　　集　新富町教育委員会社会教育課
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　（有）黒田謄写堂